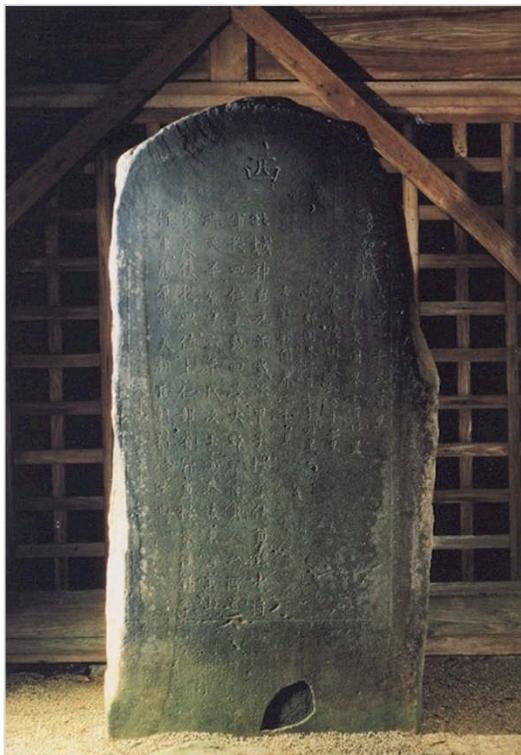


多賀城市史跡案内サークル(20周年記念)・みやぎ街道交流会協同
史跡のまち再生事業

「多賀城碑のなぞを探る！」

報告書



平成24年12月1・2日

多賀城市史跡案内サークル
みやぎ街道交流会

目 次

1. プログラム	1
2. オープニングセレモニー		
主催者あいさつ		
多賀城市史跡案内サークル 会長	大山 真由美 3
みやぎ街道交流会 会長	白鳥 良一 4
来賓ごあいさつ		
多賀城市長	菊池 健次郎 氏 5
3. 作文発表会		
1) 作文募集チラシ	7
2) (参考資料)多賀城碑の内容	8
3) 応募及び入賞作品一覧	9
4) 応募作品		
大 賞 大畠 直晴 (塩竈市)	11
優秀賞 小林 悅子 (多賀城市)	13
入 選 氏家 範雄 (塩竈市)	14
〃 松浦 佳子 (多賀城市)	15
〃 伊藤 均 (多賀城市)	16
〃 武田 俊一郎 (仙台市宮城野区)	17
特別賞 佐々木 稔 (七ヶ浜町)	18
参加賞 柴田 十一夫 (多賀城市)	19
〃 菅原 伸一 (利府町)	20
〃 松川 和夫 (多賀城市)	21
〃 小野 友和 (名取市)	22
〃 小澤 操 (多賀城市)	23
〃 大橋 光雄 (多賀城市)	24
5) 講 評 審査委員代表 白鳥 良一	25
4. 記念講演会	28
1) 講演資料		
5. 探訪ウォーク	34
6. 新聞報道	38
7. アンケート結果	39
【参考】 主催・共催団体の紹介	43
多賀城市史跡案内サークル20年のあゆみ	44

多賀城市史跡案内サークル(20周年記念)・みやぎ街道交流会協同
史跡のまち再生事業「多賀城碑のなぞを探る!」

プログラム

12月1日(土)

【第1部】発表・講演会 [13:00~16:45] 会場／東北歴史博物館 講堂

■オープニングセレモニー [13:15~14:15]

主催者あいさつ	多賀城市史跡案内サークル 会長	大山 真由美
	みやぎ街道交流会 会長	白鳥 良一
来賓ごあいさつ	多賀城市長	菊池 健次郎 氏

■作文発表会 [13:15~14:15]

別途募集した「第1回 多賀城碑のなぞを探る」の作文について、入選した作者に作品概要を発表していただき、来場者の投票も含めて大賞・優秀賞を決定。

■記念講演 [14:30~16:00]

『多賀城跡 近年の新たな成果』

宮城県多賀城跡調査研究所所長 佐藤 則之 氏

■表彰式 [16:10~16:30]

作文発表の大賞・優秀賞発表及び大賞・優秀賞・入選・特別賞表彰。

■講評 [16:30~16:45]

選考委員代表(みやぎ街道交流会会長) 白鳥 良一

【第2部】交流会(街道談義) [17:30~19:30] 会場／キリンビヤポート仙台

発表者、講師を交えた有志による街道談義を実施。

12月2日(日)

【第3部】探訪ウォーク [9:30~14:00]

多賀城市史跡案内サークル会員の案内より、多賀城跡及びその周辺の史跡などを探訪。

Aコース：古代多賀城跡の史跡を巡る

JR東北本線[国府多賀城駅]集合・出発～漏刻モニュメント～(南北大路跡)～外郭南門跡～多賀城碑～政庁跡～外郭東門跡～陸奥総社宮～館前遺跡～JR国府多賀城駅解散 (全約5km)

Bコース：歌枕の地(奥の細道)を訪れる

JR仙石線[多賀城駅]集合・出発～末の松山～沖の井(沖の石)～野田の玉川・思惑の橋～(多賀城廃寺)～多賀城碑～芭蕉翁礼賛の碑～浮島～JR国府多賀城駅解散 (全約7km)

Cコース：多賀城跡近傍の神社を巡る

JR東北本線[陸前山王駅]集合・出発～山王遺跡(国司館跡)～日吉神社～南宮神社～貴船神社～多賀城神社～多賀神社～陸奥総社宮～荒はばき神社～浮島神社～JR国府多賀城駅解散 (全約7km)

開催趣意

多賀城碑は、陸奥国の国府多賀城跡内にある江戸時代初めに発見された石碑で、平成10年6月に国の重要文化財に指定されています。大野東人による724年の多賀城創建と762年に藤原惠美朝麿による修造など重要な記載があり、また数少ない奈良時代の金石文としても貴重です。

この多賀城碑は、発見当初からさまざまな論争があり、謎の多い碑です。現在でも解明されていない部分について、幅広く「謎」の解明に参加してもらうことにより、多賀城碑の真髄に迫りたいと思います。また関連して、多賀城跡の最近の調査研究の成果について、第一線の研究者による講演会を実施します。

このことにより、多賀城碑の存在意義や歴史背景を知るきっかけとなり、多賀城の復興まちづくりの一助になることを期待します。

※金石文(きんせきぶん)：金属や石などに記された文字資料

共 催 おくの細道松島海道・NPOみなとしほがま

後 援 多賀城市・多賀城市教育委員会・多賀城市観光協会・東北歴史博物館

2. オープニングセレモニー



主催者あいさつ

多賀城市史跡案内サークル 会長 大山 真由美
みやぎ街道交流会 会長 白鳥 良一

来賓ごあいさつ

多賀城市長 菊池 健次郎 氏

主催者あいさつ

多賀城市史跡案内サークル
会長 大山 真由美



本日は多賀城
市史跡案内サー
クル（20周年記
念）・みやぎ街道
交流会協同 史
跡のまち再生事
業「多賀城碑のな
ぞを探る！」にお

越しいただきまして誠にありがとうございます。

また、お忙しい中、ご後援いただきました多賀城市長、教育長にご出席いただき心から感謝申し上げます。

本事業はみやぎ街道交流会と協同で、おくの細道松島海道・NPO みなとしおがまととの共催で開催いたしました。

当サークルは、平成3年から始まった多賀城市教育委員会主催の史跡案内ボランティア養成講座を受講したメンバーでスタートし、今年20年目を迎えました。

多賀城跡を中心に史跡案内をはじめ清掃活動や地域行事への参加、機関誌「いしぶみ」の発行、講演会等の自主企画事業等を行っております。

史跡案内を通じて一番感じることは、古代東北を語るには多賀城はかかせない存在だということです。そしてなにより「多賀城碑」がなければ発掘成果の実証が裏付けされないことです。また、発見当初から真偽論争で注目となり、今だ解明されていないなぞ多き碑もあります。

私たち会員は毎月勉強会を行っていますが、今年のテーマは「多賀城碑のなぞ」をとりあげ、会員思いの考えで謎解きを行いました。勉強会で謎解きの発表をしていくうちに、もっと多くの方の考えを知りたくなりました。

今回「多賀城碑」にスポットをあて、未解決の謎をより多くの方と共有して考える機会となればとの思いと 3.11 東日本大震災で市の 1/3 の被害を受けた多賀城市が先人の残した貴重な文化財で再生できればとの思いで企画したものです。

多賀城碑は天平宝字六年十二月一日に藤原朝穂が建立してから今年 1250 年目にあたります。皆様お気付きかもしれません、今回の事業はあえて記念すべきこの日を選びました。

多賀城碑が多く歴史ファンの関心に火が着き、かつては西行・松尾芭蕉をはじめ多くの文人たちが訪れたように、全国から来訪者が足を運ぶようになることが復興の足がかりになることを祈っています。

今回は「多賀城」と「西」をテーマに 13 名の方から作文をお寄せいただきました。応募者の皆様ありがとうございます。皆様の作品は「多賀城碑」が建立された時代背景を深く学習し、古代多賀城に思いを寄せる心が十分伝わってきました。

来年引き続き「多賀城碑の謎を探る！」は作文を募集いたします。ご来場の皆様の中に次回ステージで発表する方が登場していただければと思っております。

このあと 6 名の入選者による発表会、続いて多賀城跡研究所の佐藤所長による記念講演、表彰式と 16:45 まで皆様どうぞ最後までお付き合いいただきたいと思います。

最後になりましたが、芭蕉も涙した「多賀城碑」を現代人で読み解くこのイベントが全国に発信できるよう皆様方のお力を借りるとともに、お集まりの皆様方の益々のご活躍をお祈りいたしましてご挨拶といたします。

主催者あいさつ

みやぎ街道交流会
会長 白鳥良一



「史跡のまち再生事業—第1回多賀城碑のなぞを探るー」開催にあたりまして、共同主催者として、ひと言ご挨拶申し上げます。

先ずは、大山真由美会長をはじめとする多賀城市史跡案内サークルの皆様、サークル結成20周年、おめでとうございます。心からお祝い申し上げますと共に、皆様のこれまでの活動に深く敬意を表させていただきます。

特別史跡多賀城跡は、陸奥国の国府及び鎮守府として、古代東北の政治・軍事・文化の中心であり、宮城県多賀城跡調査研究所により、発掘調査による解明が続けられている、日本を代表する遺跡であります。

皆様は平成5年に多賀城跡の案内サークルを結成され、常に研鑽を重ねて新たな成果を取り込みながら、来訪した方々に観光案内を超えて、多賀城跡の発掘調査など明らかにされた歴史的価値をもわかりやすく伝える活動を20年もの長きにわたり黙々と続けてこられました。また、解明された多賀城跡の学術的・文学的価値やサークルの活動などを載せた会報「いしぶみ」は今年9月までに実に42号が刊行されております。サークルのこうした長く地道な活動は、特別史跡の価値の普及と保護に大きな役割を果たしてきただけではなく、貴重な地域資源を活かした活動として史跡が所在する多賀城市・宮城県の活性化にも貢献しているものと考えております。

私たち「みやぎ街道交流会」は、平成19年5月に設立し、宮城の地の自然、歴史、文化、風土などの豊かな地域資源、とりわけ街道と舟運に関する地域資源の保存と持

組む各種団体や人々に呼びかけ、心豊かで誇りあるみやぎの地域づくりに貢献することを目的として活動しております。

具体的には、宮城県内及び東北各地の街道関連団体との交流・連携の実践や支援、地域資源の保存・継承のための探訪会や研修会・交流会を開催するなどの活動を行っています。これらの活動をとおして、それぞれの地域でさまざまな活動に取り組んでおられる、個人や団体同士の交流や連携を支えるプラットホーム的な役割を果たしたいと考えております。

こうしたことから、今回は東山道で都と結ばれていた、「特別史跡多賀城跡」の史跡案内を通して、歴史資源の保存と活用に貢献する活動を続けておられる、多賀城市史跡案内サークル（20周年記念）の史跡のまち再生事業「第1回多賀城碑のなぞを探る」作文募集事業を支援させていただき、サークルの更なる発展と地域の活性化の輪の広がりにいささかでも貢献できればと考え、主催者に加わらせていただいたところであります。

本日はこのあと、入選者による作品の発表、宮城県多賀城跡調査研究所の佐藤則之所長による記念講演、審査結果の発表、表彰式と続きますが、会場の皆さん投票での作品が大賞に選ばれるのか、今から大変楽しみであります。

最後に、ご多忙の中、入選作品の審査並びに記念講演の講師をお引き受けいただきました宮城県多賀城跡調査研究所の佐藤所長さん、会場を提供していただきました東北歴史博物館様、そして公務ご多忙の中ご臨席を賜り、このあとご挨拶を頂戴いたします来賓の多賀城市長の菊地健次郎様、教育長の菊地昭吾様、さらには共催や後援をいただいた団体の皆様に心からお礼を申し上げまして、開催のご挨拶といたします。

来賓ごあいさつ

多賀城市長
菊地 健次郎 氏



本日、「多賀城碑のなぞを探る」発表会が盛大に開催される事を心よりお喜び申し上げます。

多賀城市史跡案内サークルの

皆様方は、平成5年の発足以来、歴代会長及び大山会長を中心にはじめ、機関紙「いしぶみ」の作成・配布、史跡周辺の清掃活動、市内学校及び地域への歴史教育への協力などの様々な事業にボランティアでご尽力されておりのことに対して、心より敬意を表したいと思います。

さて、本日の主題の多賀城碑は、栃木県の那須国造碑、群馬県の多胡碑とともに、日本三古碑のひとつとして知られています。碑は、江戸時代に土中より発見されて以来、歌枕の「壺碑」と結び付けられて、広く世に知れ渡る事となりましたが、明治以降は、江戸時代に作られた偽物であるとの説が主流となりました。

しかし、多賀城跡の発掘調査の進捗に伴い、偽物説を覆す新たな事実が判明し、多賀城碑の総合的な再検討や覆屋の解体修理に伴う発掘調査の結果などから偽物説は払拭され、平成10年6月に国の重要文化財に指定されたところです。重要文化財の指定は、史跡案内サークルの皆様が行う多賀城を訪れた方々へのわかりやすく丁寧なガイドなどの地道な活動などの関係者に尽力によるものと感じており、改めて心より感謝申し上げる次第です。

特別史跡多賀城跡や重要文化財多賀城碑をはじめとする市内の貴重な文化と遺産を保存し、後世に継承する事がこのまちに住む我々の責務と認識しています。

この様な中、平成20年に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」は、地域固有の歴史、伝統、文化を維持・向上し、個性豊かな地域社会の実現を図り、都市の健全な発展と文化の向上に寄与する事を目的とした法律ですが、悠久の歴史を持つ本市にふさわしいものと強く感じ取っています。そのため、本市では法律施行後の翌年から、歴史的風致維持向上計画の策定に着手し、平成23年12月6日に文部科学省、農林水産省、国土交通省の認可を受けています。これは東北地方では3番目、全国では27番目の認定です。

これを積極的に活用し、震災以前よりも魅力あるまちづくりを推進していきたいと考えていますので、皆様方には今後とも格別なるご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、多賀城市史跡案内サークルの益々のご発展をご祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきたいと思います。

3. 作文発表会



史跡のまち再生事業 「多賀城市史跡案内サークル（20周年記念）・みやぎ街道交流会協同」

第一回 多賀城碑のなぞを探る！

古代多賀城を知る唯一重要な文献資料としての国重要文化財の多賀城碑。
いまだ解明されていないテーマをみなさんでなぞ解きしてみませんか？

今年のテーマは、「西」って何？と「多賀城って呼ばれたのはなぜ？」。どちらかのテーマを選んでなぞ解きの作文をして、応募してください。

12月1日、東北歴史博物館にて入選者による発表後、来場者による投票で大賞が決定します。
今までの真偽論争にない、あなたならではの独創的な解説をお待ちしています。

【応募要領】

テーマ 次の2つのテーマのうちどちらかを選択し、その解説とその根拠を作文してください。

テーマ① 「西」は何を意味しているのか？

テーマ② 「多賀城」の由来は？

一人1点のみ。応募作品はオリジナル作品に限ります。

応募方法 どなたでも応募可能です。（但し、日本語に書かれたもの）

本文の字数は一〇〇〇字程度。原稿用紙もしくはワープロ原稿。

テーマ番号・氏名・住所・連絡先（携帯電話可）・年齢・性別・

職業（学生の場合は学校名・学年）を記載したものを同封の上、

左記まで郵送にて応募ください。

入選者及び大賞受賞者へ記念品進呈いたします。

平成24年10月20日必着です。

〒985-0873 多賀城市中央2丁目25-3

多賀城市市民活動サポートセンター レターケース④

「多賀城市史跡案内サークル」宛

問合せ先

多賀城市史跡案内サークル事務局 担当 大橋

電話 090(1937)3147

主催 多賀城市史跡案内サークル

みやぎ街道交流会

協力

おくの細道松島海道

後援

NPOみなとしおがま
多賀城市

多賀城市教育委員会

多賀城市観光協会

東北歴史博物館

読み下し	翻刻	拓本
西	<p>此城は、神龜元年歲は甲子に次る、按察使・兼鎮守將軍藤原惠美朝臣朝鴉修造也。天平宝字六年十二月一日。</p>	
西	<p>多賀城去京一千五百里 去蝦夷國界一百廿里 去常陸國界四百十二里 去下野國界二百七十四里 去駢鞨國界三千里</p>	

史跡のまち再生事業「多賀城碑の謎を探る」作文募集 応募及び入賞作品一覧

【応募作品】

テーマ①	「西」は何を意味しているのか？	8件	計13件
テーマ②	「多賀城」の由来は？	5件	

【作品の選考】

[入選作品の選考]

審査委員会で入選6作品を選考。なお、入選のほかに特別賞1作品も選考。

(選考委員) 佐藤則之 氏(多賀城跡調査研究所長)・白鳥良一(みやぎ街道交流会会長)

[大賞・優秀賞の決定]

入選者に発表会(12月1日)で発表して頂き、参加者の投票も含めて決定。

【選考の結果】

選考結果	テーマ	テーマ別No	氏名	居住地	備考
大賞	①	西-6	大畠 直晴	塩竈市	
優秀賞	①	西-3	小林 悅子	多賀城市	
入選	①	西-1	氏家 範雄	塩竈市	
		西-4	松浦 佳子	多賀城市	
	②	多-2	伊藤 均	多賀城市	
		多-5	武田 俊一郎	仙台市宮城野区	
特別賞	①	西-7	佐々木 稔	七ヶ浜町	
(参加賞)	①	西-2	柴田 十一夫	多賀城市	
		西-5	菅原 伸一	利府町	
		西-8	松川 和夫	多賀城市	
	②	多-1	小野 友和	名取市	
		多-3	小澤 操	多賀城市	
		多-4	大橋 光雄	多賀城市	

【表彰式】

入賞者には、賞状とそれに応じた記念品・粗品が贈られた。

また、参加賞にも、記念品・粗品が贈られた。

応募作品



写真：発表する入選者
(松浦佳子氏は欠席のため代読された)

《大賞》

「西」は何を意味しているのか？

【西-6】 大畠 直晴（塩竈市）

藤原惠美朝臣朝獁が陸奥出羽按察使兼鎮守將軍として多賀城に赴任したのは天平宝字元年でした。朝獁が陸奥の鎮撫を遂げ参議への昇進は天平宝字六年十二月です。赴任以来六年有余が過ぎていきました。

朝廷の蝦夷政策は大君に畏敬の念を持たせ永く朝廷に従わせようとの政策であり、講じられた施策は数多くあると思われますが、朝獁はこれら朝廷の意向の下に具体策を奏上しそれを敷衍、実行する立場に有りました。この時期には建碑構想は既に具体化され製作が進められていたことでしょう。

同時代の日本地図ではないかとされている行基図は日本が東西に芋虫のように長く寝そべっており地図の体を成していますがそれによると多賀城とおぼしき所よりほぼ西に山城京が描かれています。これが当時の人の地理感覚といってよいと思われます。京は大君の坐します処、朝廷のある処であって多賀城政府の存在理由でもあります。陸奥にとって西の方角は極めて重要で神聖な方位なのです。後年昭和の戦役で故国を遠く離れた兵士が宮城の方角を仰ぎ遙拝したことを考えると、奈良時代の人々にも相通じた心があったと思われます。このように考えると碑面上部中央にある大書の『西』の文字は明らかに京を指示していると見るのが妥当です。『西』とは一義的には西の方角であり、次には京を意味し、本質的には京に坐します大君を恐懼

し方位を人格化させた天皇の人称代名詞だったのです。人心掌握の巧みさに驚かされます。

碑は『西』一文字で界線で囲まれた全文を包摂しており碑文の内容が天皇の裁可により朝廷が朝獁に実行せしめた施策であることを知らしめているのです。この碑を多賀城政庁内に君臨させ、儀式の度に官民を拝礼せしめ、天皇への畏敬と忠誠心を培わせ、強要したことは想像に難くないと思われます。

発掘調査の結果で、碑は多賀城築地塀内政庁南門附近に、政庁と南門を結ぶ道路右側に建てられていたことが判明しております。政庁南門を通る者を睥睨する位置に屹立し、さぞ威圧していた事でしょう。

この『西』の天皇は誰かを推考すれば時の天皇淳仁となります。『西』の文字の著しい大きさは絶頂期の淳仁天皇と藤原惠美朝臣押勝の権力の大きさを顕し内外に誇示したもので、政権の専横的性格を図らずも示す結果となりました。建碑数年後「押勝の乱」が起き、この乱を制圧し反乱者を政界から一掃した孝謙上皇は、重祚し称徳天皇となります。称徳は多くの敵を肅清し、返す刀で碑を土中に封じ込めたと思われます。政変により建碑された期間は短く人々に膾炙されるいとまもなく忘却され『西』の持つ意味も亡失されてしまい碑の受難の始まりとなりました。

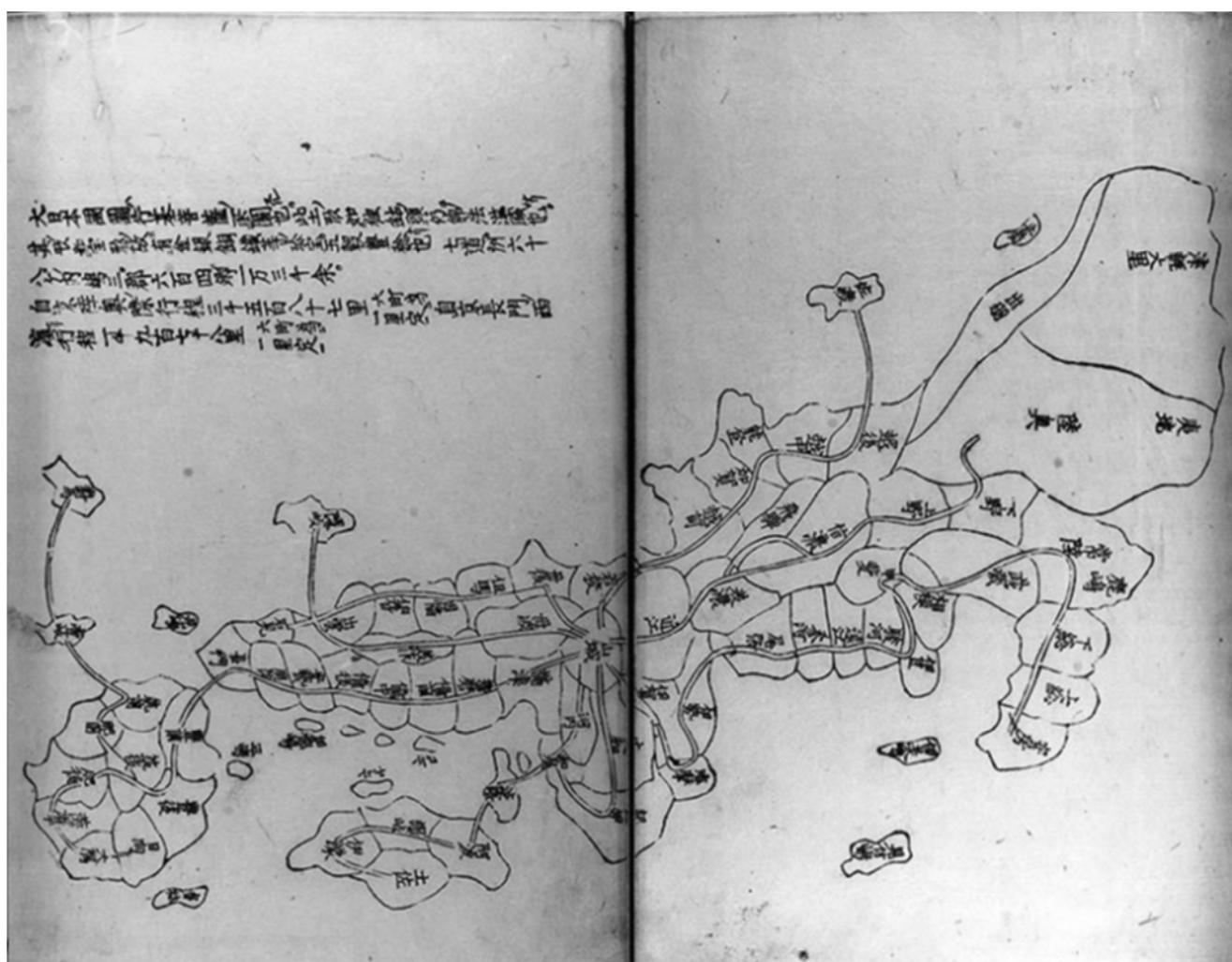
了

参考文献

下記の書物を参考とさせて戴きました。

- 「続日本紀」新日本古典文学大系
岩波書店 1989年
「多賀城碑・その謎を解く(増補版)」雄山閣
安倍辰夫 平川南 平成11年
「蝦夷とは誰か」 同成社
松本建速 2011年
「真実の東北王朝」 ミネルヴァ書房
古田武彦 2012年

- 「日本の時代史4 律令国家と天平文化」
吉川弘文館 佐藤信 2002年
「古代の蝦夷と城柵」 吉川弘文館
熊谷公男 2004年
「日本通史第4巻」 岩波書店 1994年
「古代東北と王権」 講談社現代新書
中道正恒 2001年
「日本古地図(行基図)」 Googleより 他



《 優秀賞 》

「西」は何を意味しているのか？

【西-3】 小林 悅子（多賀城市）

「西」は、ズバリ朝獁が修造した秋田城のその向こうの鞍鞆を含む「大陸全体」を指していたと思う。大陸に対する脅威、交易、そしてはるか西にあるシルクロード文化への羨望も含めてこの碑を立てるときの朝獁の頭の中には「西」が去来していたのだと思う。

朝獁がこの碑を立てた 762 年は、白村江で大敗した 663 年から約百年を経過している。白村江で新羅に負けた天智天皇は、唐が攻めてくるのではとの脅威から都を飛鳥から近江へ移したほど大陸の脅威を感じていた。朝獁は、天智天皇が大化の革新と一緒に成し遂げた中臣鎌足から数えて五代目の直系に当たる。すなわち不比等、武智麻呂、仲麻呂そしてその子が朝獁である。たしかに朝獁が陸奥に来たときは、父仲麻呂の全盛時代である。中央でももちろんであったが佐伯全成の後任で赴任した朝獁も向かうところ敵なしで、雄勝城や桃生城も完成し、蝦夷を制圧していた。その功により従四位下という役職を得ている。

また天平宝字四年に朝獁は大宰府に派遣され新羅使を詰問。数々の無礼を指摘し追い返したりしている。その後も順調に出世していく藤原家の若きエース朝獁ではあったが、しかし大陸の不穏な動きを国際人としての朝獁は、キヤッチし日本海の海上交通にも不安を感じていた。その証拠に海上に頼らない秋田への陸からの最短道を計画していた。

今、陸奥の地に東人が建てた掘立式から礎石式への大修造という大事業をやってのけ、「多賀城は安泰なり」と碑に刻む時、頭の中には「西」を侮るな！「大陸」との力の均衡をうまく保って決して戦いをするな！ 鞍鞆から三千里は離れているが、それが決して遠い距離ではなくいつだって倭国に脅威をもたらす存在に成り得るのだと警告しているのだと思う。くれぐれも対応をあやまるなどまるで朝獁は千二百五十年後の現在の日中のこの険悪な関係を予想していたように、自らの想いを碑の「西」に込めたのだ。

それと更につけ加えるなら、朝獁もはるかシルクロードへ憧れがあったにちがいない。

くしくも多賀城の観光ポスターには「この丘に吹く風は、シルクロードへと続いている。日本という国家が成立して行く中で大陸から伝授した律令制が……」とある。

いやが応でもシルクロードの恩恵にあずかり今日の文明を築いてきたのだから我々も「西」に目を向け大陸の様々な国と関係を改善してゆくことが朝獁の意志に沿うことだと思う。

《入選》

「西」は何を意味しているのか？

【西-1】 氏家 範雄（塩竈市）

1. 碑額面の「西」は板碑の種子に劣らない。

藤原朝穂が代表として名を残す多賀城碑は往古から詠み人に壺ノ碑と歌われ陸奥への口マンを掻き立ててきた。その価値は周知の通りである。

予て碑の真偽を取り沙汰されてきたが此の碑の奥深さを識って実物と対面すれば、もう遲疑逡巡する余地はない。それ程、朝穂の怠いが迫ってくるような遺碑なのである。その核心となるのが額面に刻まれる「西」の一文字であり、それに凝縮された意味は仏の白毫、板碑の種子に匹敵する。

軍事と経済の拠点、多賀城は勃興途上で、藤原朝穂は天平宝字元年(757)から自らの一族が滅亡する天平宝字8年(764)まで任じていた。当該碑はその間の天平宝字6年に立てられたものである。

悲惨な結末の原因は第47代淳仁天皇(在位758-764)を推した父の惠美押勝(藤原仲麻呂)が相対する孝謙上皇(重祚して称徳天皇)道鏡側との軍事衝突で、朝穂も一族と運命を共にし無念の死を遂げた。碑の造立から僅か2年後の悲劇だった。

碑文を単に改修と道程を表わす観点で記念碑を見るように捉えては碑は、可哀相なのである。

陸奥経営に携わる指揮官らは俘囚動向に気を抜けない。一方、彼等を駆使しての出羽雄勝城や陸奥桃生城造営は急ピッチで進められ、柵を造り道を拓く蝦夷統治は国府の偉業として評価されてゆく。殊に黄金献上(749)の名声以来、陸奥国多賀城は内外の注目の的となっていた。

恵美の乱の少し前、忙しい前線と不穏な都の狭間にいた朝穂にとって心的負担は計り知れない。天か地か、恵美押勝あっての自分、吉凶を判定し碑を建てる、「西」に基づいて予見した通り物事は進むのか否か、圧縮された一文字を遺した意味は重い。

2. 「西」の意味とその根拠について

当時、何か大きな事を考えたり実行しようとする時は、陰陽説と合わせて万物総て五行の相生と相克により生成されると説明した学説から導かれて、先ず五行説への運行から四方を割り当て方位を配し、五行相生に基づく相生説と五德説から万般事象の解説や運勢判断を決定する手段として使われていた。

陸奥政府多賀城の位置運勢と不安要素を説き明かそうとしたばかりか、一族が崇める天皇の交替説明をも成した。現代では想像すら難しいが社会形成上重大な思想であった。

これらの天地間を運行する五つの元素から多賀城は五方の位置に割当てられた「西」とされた。或は古くから既に配されていた。

すなわち陰陽五行説とは

五行→木火土金水の順で、金は貢、賀の“集まる”意を。

五方→東南○西北(○=中央、西=兌)の順で、西枠の兌は“悦ぶ”意を、乾坤の間は天地自然。

五常→仁礼信義智の順、

五数→87596の順、

五情→喜樂怒哀の順で各意など相生する説である。

西と同列に金義9怒が並ぶ。土は金を生み金は水を生む、9は陽のもっとも多い数で地天安泰を、怒は果たして……

現代人には自然異変、人事の吉凶をどう解説したのか実態は知る由もないが今回の解説根拠として陰陽五行以外には有り得まい。

「西」は将に究極の一文字であり深いメッセージを潜ませて後世に問うている。

「西」は現代に用いる東西南北とは異質のもので陰陽の域、主文と一線を画して別格にある説である。

さて、多賀城碑の魅力は移る世に尽きることはないだろう。泪した芭蕉は若しかしたら解っていたのかも知れない。

以上

《入選》

「西」は何を意味しているのか？

【西-4】 松浦 佳子（多賀城市）

「夕焼けて西の十万億土透く」

現代俳句の代表山口誓子の句だ。私の若いときがそうであったように、俳句や仏教に全く接点の無い人には何の感慨も無いと思う。美しい夕焼けを見るたびに思い出す一句だ。俳句の説明をするのも変だが、荘厳な夕焼けを見ていると、その遙か遠くに極楽浄土が透けて見えるようだという意味と思う。

多賀城碑は夕日に向かって建っている。碑の成立や碑文については研究や論議が尽くされてきている。これからもデジタル技術の進歩による新しい発見があるかもしれない。芭蕉の歌枕を訪ねた時、たまたま夕暮れ時だった。そのせいか最初に目に付いたのが「西」の文字だった。単純に西に向いているからだと思った。誓子の句を思い出して仏教の西方浄土のイメージが浮かんだ。全体のデザインから考えても、「西」の一文字は余計に思える。それが謎となり様々な議論が続いていると聞く。何の知識もないなりに考えてみた。古代の人たちが石を運び、文字を彫刻、丘の上に建てた。そのとき間違いないく「西」に向けるようにとの指示だったのではないかだろうか。

十数年前にハワイに旅行した。乗せられた観光バスが海の見える丘の上に停まった。ガイドが日系移民の墓地ですとの説明があった。おびただしい墓石が整然と日本の方角を向いて建てられていた。苦難の末に日本に帰ることなく石になった人々が全員故国を見て丘のうえに立っているような気がした。浮かれた観光気分が吹き飛ぶような強い印象を持った。

時代が変わっても人間の感情は同じではないか。望郷の思いで海の向こうを見ていた人々と多賀城の丘で 都を 浄土を 夕焼けの中に探した人々が重なる。もう歌を詠まなくなつた晩年の大伴家持もその中にいる。

特別史跡に指定されて保全されているため政庁跡の周辺は人家が少ない。そのため古代そのままではないにしろ、丘の上から眺める落日は当時と同じように思える。なまじ何も残っていないだけに同じ場所に立ち想像をめぐらせるのは楽しい。沢山の人々が血縁はなくとも私の御先祖のように思える。全ての人々が「西」の十万億土の彼方で幸せに暮らしているような気がする。きっとそこには地震も 津波も 戦災も無い素敵な場所に違いないと考える。

《入選》

「多賀城」の由来は？

【多-2】 伊藤 均（多賀城市）

奥羽越三国の辺境における建郡の特徴は移民を基にして建郡することである。城柵の設置と一体となって、その周囲に柵戸と呼ばれる移民が強制的に移住させられ、彼らに開拓と村づくりに当たらせ、公民として郷に編成し、郡を設置した。

これらのことばは国史の移民記事や関東系土器の出土から裏付けられる。

※715年(靈亀元年)5月30日 - 下野国ほか相模、上総、常陸、上野、武藏6国の富民1,000戸(2万人?)を陸奥国に配する。(續日本紀)

※八幡崎B遺跡、山王・市川橋遺跡からは6世紀末から8世紀前半の関東系土師器が出土した。このことから陸奥国では6世紀末から板東諸国からの移民があったことが明らかになった。移民が本格化するのは、大化の改新後の7世紀半ばから。

郷名と移民

『倭名類聚抄』(10世紀初めの辞書)には全国の郷名を載せるが、陸奥国では坂東・東国地方の郡名・国名、陸奥国の南部の郡名と同じ郷名がある。これらの郷名は、移民が移住地の郷・郡名に、郷里の国・郡名などを付けたためである。移民とともに地名が移動したのである。これから、どの地域からどの地域へ移民があったか分かる。(館長講座10章)

宮城郡の多賀郷は715年常陸国多珂郡からの移民によって成立したと考えられる。

ではなぜ多珂郡の名称を継承しなかったかという疑問がわく。

ひとつには同じ常陸国多珂郡からの移民が先行した行方郡多珂郷において多珂の名称をそのまま使用したため重複を避けたのではないか。

ふたつめには『風土記』撰進の命が諸国に下されたとき、それぞれの郡・郷の地名に好字を付けるようにという命に従ったためではないか。

この時期、地名や神社名に読みを同じに様々な好字を当てることが普通に行われていた。夕力に対する表記として「高」「多珂」「多賀」等が当てられた。

※多賀郷(たがごう)は、『倭名類聚抄』が宮城郡の郷を列挙する中に見える。多賀は国府の多賀城が置かれ、城外の町からは「多珂」と書かれた木簡が出土した。名は多珂郡とも書かれた常陸国の多賀郡に由来し、そこからの移民が多賀郷を作ったと推測される。(ウィキペディア)

さて本題の多賀城の名前の由来だが、これまでの考察をまとめると宮城郡に715年(考古学的にはさらに前)常陸国多珂郡からの移民が柵戸として現在の多賀城の地に移住し、多賀郷という地名が成立した。その地名から多賀の柵という城柵名が成立し、大野東人らの規模拡充とともに「多賀城」と呼ばれるようになった。

以上が本稿の結論である。

《入選》

「多賀城」の由来は？

【多-5】 武田 俊一郎（仙台市宮城野区）

多賀城は設立当初、多賀柵と称されていたと考えられる。「多賀」の地に設けられた大和朝廷の北方制圧に向けたベースキャンプの一つであり、大和朝廷の勢力範囲の境界の意も示していたのであろう。

現在の東北地方は、当時の朝廷から遙かに遠い地域にあり、朝廷の影響の及ばない隔絶された地域であった。その方角は朝廷から見て鬼門にあたることから、ダーティーなイメージばかりが先行し、決して幸いをもたらす地ではないと思われていたであろう。

その一帯は獸(けもの)に混ざって異民族の蝦夷(えみし)が生息しているのであろうとの思いから、広範な地域をひと括りにして、蛇蝦(たか・たが)のような字を当て、呼称していたのであろうと思われる。そこに暮らす人々を朝廷の側から思い起こす時は、蛇や海老のように、地や水底を這いまわっているのだろうと蝦夷(えみし)と蔑称し、見下していたのだろう。また、虎に縞模様をつけたと譬えられる竹を恐ろしい蝦夷に重ね、「竹(たか)」の地と恐れてもいたであろう。さらに、朝廷が未だ征服していない地であったことから、「誰が」の意も込めていたのかもしれない。

それが「多賀」と、変更されたのは朝廷の征服欲の眼が北方に向かったためであろう。一帯を言祝ぎ、朝廷に幸いをもたらす拠点とする意から『多賀』としたのではなかろうか。それは、恐ろしい地に派遣される兵士の気持ちを和らげ、住民に対する柔軟策も示し、その後の統治を円滑に進めることを知らしめようとしたこともあったからであろう。

これは征圧者が自己を正当化しようとする際に用いる代表的な手法です。相手を非道・極悪化することで自己の罪悪感は薄れ、むしろ正義感に満たされた戦いの集団に変身させて鼓舞するという事を、この地名の変遷で実践したのではなかろうか？

《 特別賞 》

「西」は何を意味しているのか？

【西-7】 佐々木 稔（七ヶ浜町）

朝はどこから来るかしら、あの山越えて、谷、越えて…という童謡があるけれど、彼らは、そんな気持ちで、ずい分遠くまで来た物だと、思った事だろう。

靺鞨国の人々の間には、太陽の昇る海の彼方には、素晴らしい大地があり、憧れでもあった。私、アムールもその一人であった。同じ考えの仲間と船に乗り込み、憧れの地、目差して旅立った。海岸近くの美しき山、(鳥海山)を左手に見ながら上陸する事が出来た。

幾つかの集落があった。人々は皆親切であった。どういう訳か若い男性が少なく、遠方から私達の若さと、狩猟民族の知識と技術は大いに役立った。

とある、集落では、特に男手少なく、山犬等が、襲って来たりすると相談受けたので、家の回りを枯草で囲って置いたら、その夜、襲って來たので火矢をもちい、何頭かは、枯草燃える灯かりを頼りに射留める事が出来た。一帯は、鹿等の獲物多く、思う存分、腕を振るう事が出来た。

そして皆、集っている時に「年寄りは、敬うことが大事、何故なら、危険な時の対処法等、経験上知っているし、子供の面倒は見て、貰うから二人、三人と子供を産む事が出来るんだ」何て偉そうな事を言つたりしたんだ。

野性の馬を、手に入れた事で、名残り惜しいし、未練もあつたけれど、また旅の再開、一路東へ向かって出発した。

その旅は、末の松山で終わった。大海原、水平線の彼方より昇る太陽、風光明媚なこの地に住む事を決意した。

多賀城政庁で働くことが出来るようになつたし、これ余談だけど、政庁の仕事で、かの集落の近くまでいった機会に、後ろめたい気持ちもあつたので、そつと様子を見に行つたら、あのやさしかった女性、赤ん坊を中にして、仲睦まじそうに男と居るのでそつと、その場を離れた。淋しかつたけれど。

多賀城政庁築時のトップ、恵美朝獨はこれを記念し、石碑を建てる事を思い立ち、靺鞨國の渡来人アムールに任せる事にした。アムールら渡来人は、その技術、知識によって政庁にとつて欠かす事の出来ない人材になっていた。

石碑を建てるに、あたっては、西という文字を入れる事が、総意みたいになっていた。ある者にとって西は西方浄土、を思わず言葉であり、日出る地を目差して來た者にとって西は、遠い、遠い故郷を偲ぶ言葉である。

何故、靺鞨より來たアムールに石彫りが、任せられたか。それは岩画という岩に彫り込む技術に秀でている國から來た人物だからだと言う事である。

「西」は何を意味しているのか？

【西-2】 柴田 十一夫（多賀城市）

「西」は「仁志」であった。
そこには親に対する子の気持ちが込められ、隠されていた。



天平宝字6年(762)秋、陸奥守藤原朝穂は正殿をはじめとする政庁の各建物の建て替えを終了した。

神亀元年(724)の陸奥国府創建時の建物は掘立式であったが、この度の修造では礎石式に改め政府全体を莊重なものへと造り変えることができた。

この業績を都の人々にどのように知らせ、後世にどう伝えていくか。

朝穂はその方法として「顕彰碑」を建立することとし、碑文の内容もすでに決めていた。

一つは多賀城の位置を表すことである。多賀城の認知度は決して高くはない。陸奥国のどの辺にあるのか。奈良の都や各國界からの距離を示し、その場所を示すことが重要である。

二つ目は、先ず国府創建の年について記し、次が一番重要なことであるが天平宝字6年の年、藤原朝穂が政庁の大規模な修造を行ったことを記録しておくことである。



その一方で朝穂にとって気になることがあった。都から時々届く話の中に、平城京に詰める父藤原仲麻呂についてのあまり良くない噂が含まれていたからである。



朝廷の中で藤原仲麻呂は光明皇太后的絶大な信頼を得ていた。

天平宝字2年(758)、仲麻呂は自分が影響力をを持つ淳仁天皇を誕生させた。仲麻呂は淳仁天皇から惠美押勝という新しい姓名を賜り、さらに天平宝字4年(760)正月には大師(だいし・太政大臣)に任命され、名実ともに権力の頂点に上り詰めた。一切の権力を手中に収め思いのままに政治を動かしたのである。

しかしその半年後、最大の後ろ盾であった光明皇太后が崩御し、権力のよりどころを失った仲麻呂はその独裁体制にも陰りが生じてきた。

さらに2年後、天平宝字6年(762)に道鏡との醜聞を咎め立てて孝謙上皇と対立するとその政治基盤はますます不安定なものとなり、朝廷内からもそれまでの目に余る横暴に対する批判が大きくなってきた。



多賀城の朝穂は父仲麻呂のことが心配であった。

自分が陸奥守となり参議となれたのも、藤原一族がそれぞれの要職に就けたのも父の力によるものである。その力に陰りが見え、政権の中で不安定な立場にいる父親に対し自分の気持ちを伝えたい、力になりたいと思った。

朝穂は顕彰碑の建立を利用しようと思った。考えたのが碑文の中に「にし」の字を入れることである。



天皇に対しは政庁の建て替えを報告するとともに忠誠を尽くす態度を表す必要がある。その表現として首部に「西」の文字を入れることにした。天皇の御座する奈良の都「平城京」はここからは西の方角にある。そこに向けて建てることがその表れである。



しかし、朝穂の本当の意図は違った。父親に対する気持ちをどう伝えるか。

朝穂は「にし」に「仁志」の文字を潜ませることにした。

「仁」は「忠」と「恕」の両面を持つ字である。「忠」は偽りのない心、まごころを示し、「恕」は思いやり、同情心を表す。つまり「仁」には他を思いやり、いつくしむ人間としての自然な気持ちが含まれている。

「志」はどうか。こころざす、こころざしであり、意志、初志である。

父仲麻呂の子供として父の立場と行動を支援し、どこまでも従うことを伝えるためにはふさわしい言葉である。但し、その意図を偽装するためには「西」の陰に置く必要がある。



さらに「西」の文字を一番目立つようにする必要がある。文字を大きくし上部中央に置くこととした。

さらに建立場所である。外郭南門を入ってすぐの右側、政庁へ向かう大路の脇とした。ここなら都から来た人々をはじめ多くの人たちの目に触れる。

天皇への服従心を装いながら父親への思いを伝えることができる。誰からも疑われることなく朝穂の意図、その目的は密かに届くのである。



2年後の天平宝字8年(764)、惠美押勝の乱により藤原一族が悲惨な結末を迎えることをこの時点では誰も知らなかつた。

終

「西」は何を意味しているのか？

【西-5】 菅原 伸一（利府町）

国重要文化財の多賀城碑には、按察使兼鎮守將軍の大野朝臣東人が神亀元年(724)に多賀城を置いたこと、そのち東海東山節度使兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獥がこの城を修造したことが記されている。しかし、誰がこの碑を建立したのか碑には何も記載されていない。それは奥羽で絶大な権力を持つ朝獥自身が建立したからであろう。碑は天平宝字6年(762)12月1日に建立されたが、その翌年に朝獥は6年の陸奥守の任期を終えて陸奥国を去っている。朝獥は去る前に自分の業績と名を後世に残すべく、この碑を記念に建てたに違いない。碑の高さは247cmで、碑面の面積の約五分の一を占める頭部に、一字だけ特に大きな字で「西」と彫られているが、なぜ「西」と書かれているのかその理由については未だ定説となるものが無い。

それでは「西」は何を意味しているのかといふと、西という字は日の沈む方角を示す文字なので、碑の「西」も日の沈む方角を指したものと考えられる。そうだとすると碑は現在とは逆の、南北大路の右側に東向きに立てられ、背は西を向いていたと推測される。すなわち、「西」と彫られた碑の裏側が西の方角なので、それを知れば他の方位は容易にわかることになる。多賀城を訪ねた駅使や官公吏は城を発つとき、曇・雨天や夜間であっても碑の示す方角に進めば東山道に出るので、その碑は旅行者の役にたつに違いない。

ところが碑は現在西向きに立っている。平成9年に碑の発掘調査が行われ、碑は最初から現在地に立てられていて、一度倒れたが17世紀前半に立て直されたことがわかったという。倒れたのは朝獥の父の仲麻呂が天平宝字8年(764)に起こした乱に、朝獥も加わったとして逆賊にされ斬殺されたので、碑も倒されたのだろうという。その他にも貞觀11年(869)の大地震大津波のとき、碑も倒れて流され元の位置とは異なる場所に埋まつたことも考えられる。江戸時代に掘り出されて立て直されたとき、碑面の西の字を見て現在のように西向きに立てたのかもしれない。

碑面の向きは別にしても、朝獥は自分の業績を記した記念碑を自分で立てるわけにもいかず、代わりに西という方角を示す碑を造らせ、そこに自分の業績と名を刻ませて後世に残すべく建立したのではないか。そのため碑の頭部の字は東南北でもよかったのだが、あえて「西」の字を使ったのは、多賀城の西に南北へ通じる東山道があり、それを示す意味もあって「西」の字を使ったと考えるのである。

以上

「西」は何を意味しているのか？

【西-8】 松川 和夫（多賀城市）

多賀城碑の碑文は、多賀城の位置を示す前段と、藤原朝獁の顕彰と思える後段に分かれていて、その内容ははつきり解る。

それでは、上段に大きくのしかかる『西』は、何を意味するのか？ この「西」には何の説明もないし、納得のいく雰囲気を暗示しているとも思えない。

それ故に、多くの歴史学者、専門家が夫々に発言される内容は、必ずしも一致しているとはいえず、未だに『謎』という形となって、今日も続いているのが現状だと思う。

「藤原朝獁」とは、どういう人だったのだろうか？

724年、多賀城を創建した「大野東人」は、15年の勤務の間に、多賀城・秋田間の連絡路を開き、地元への配慮と人望をもって、蝦夷の反乱を鎮静している。「朝獁」は、30余年後、757年、同じ道を辿ることになる。多賀城修造、秋田城修復、雄勝城造成、桃生城築城などを、5年の短期間に「大野東人」に、劣らない功績を遺した。その間、蝦夷とは、一戦も交えることが無かつたというのは、まさに「大野東人」の尽力の結果である。危機管理能力、洞察力に秀でている「朝獁」には、このことは良く解っていたと思う。故に、記念碑を建立し、尊敬する大野東人に劣らぬ功績を後世に示したいと決断したものと考えられる。

碑文後段の、参議昇格は、多賀城碑建立日と同じであるし、東海東山節度使の東山は、実際に辞令が出ていたのか、従四位上は、いつ出たのか、父、藤原仲麻呂の権勢のもと、名譽的に記

した面はないか？

『西』が、地域方角を指しているとすれば、多賀城は北緯38度であり、この時点では、「新羅」である。その北の靺鞨族の「渤海国」に当たるかも知れない。

608年、遺隋使の小野妹子に託した国書に「東の天皇、敬みて西の皇帝にもうす…」とあり、ここで云う「西」は大陸を指している。

渤海国とは友好的である。渤海国と敵対する黒水靺鞨は、唐の一部であり、唐とは友好関係にある。この時点においては、「新羅」も脅威にはならない。

『西』を、国語辞典で引くと、「西に向かっていく」という意味合いがある。多賀城にとって、朝廷は正確には西南であるが、広義で『西』と考えることが出来る。多賀城碑の『西』は、絶対的な権力を奮った父への報告も含めて、朝廷への忠誠の表明である。

この碑は、大陸を見ると同時に、朝廷を向いて居り、更には、蝦夷に対する牽制もある。即ち、日本の西の文化は、ここまで来ている。やがて、東北にも第二、第三の碑が立つことになるだろう。と言っている様である。

「多賀城」の由来は？

【多-1】 小野 友和（名取市）

「多賀城」以前の国府は仙台市太白区郡山にある「郡山遺跡」であったことが定説になっています。しかし、今まで見つかっている文献資料には「郡山遺跡」についての記述が全くありません。

郡山遺跡の所在地は、明治 22 年の市町村制施行以前は「名取郡郡山村」でした。しかし、郡山という地名がいつ頃から呼称されていたかは不明です（封内風土記（江戸中期）には「名取郡郡山邑」という記載があります）。

大正時代に発行された「名取郡誌」では多賀城以前の国府が岩沼市武隈に所在していたと推定しています。さらに地名から名取市高館にもあった可能性を示唆しています。

昭和 30 年に名取郡内の 2 町 4 村が合併して「名取町」が発足したのですが、その内の一村が「高館村」（明治 22 年に名取郡吉田村、川上村、熊野堂村が合併）でした。

郡山遺跡が国府として名取郡郡山村に置かれる以前に、高館村内の高館山または大館山に仮の役所が設置され、その高い所から郡山の国府の建設状況を監視・監督、そして建設推進の激励をしていたと推察されます。初めは高い所の砦であったのですが、それが指揮者の住む館が設置され、館がやがては城になったと解釈されます。そして高（たか）が、「里は二字として嘉名を取れ」の政策により、国府の多賀（たが）になつたと考えられます。

そこで私の推測ですが造立当初から郡山遺跡は「多賀城」と呼称されていたのではないだろうかと考えます。その根拠としては旧名取郡内には延喜式神名帳（平安中期）に記載された神社が二社あり、うち一社が多賀神社です。しかも多賀神社が二社あり、両社とも起源は古く、由緒によると景行天皇四十（西暦 110）年に日本武尊が東夷追討の折に勧請したと記されています。

明治時代にどちらの多賀神社が延喜式内神社かの論争があり、西多賀神社に軍配が上がったのですが、私の考えとしては二社を総称して「多賀神社」と呼称したものと思われます。しかし、勧請した時点で「多賀神社」と名付けられたかは不明です。

そのうち一社は仙台市太白区西多賀地区に鎮座し、もう一社は名取市高柳地区に鎮座し、二社の間に郡山遺跡が所在しています。

そして、郡山遺跡（多賀城）の守護神として東西に既存の多賀神社をグレードアップした形で配置し、郡山遺跡（多賀城）からみて西にあるのを西多賀神社と、東にあるのを東多賀神社と名付けたのではと考えます。

「多賀城」の由来は？

【多-3】 小澤操（多賀城市）

天平宝字六年(762)に建立の多賀城碑の碑面には、「多賀城」と明記されて主要な地までの距離が示されている。多賀城は陸奥国の行政・軍事の中心として重要な位置であったことがうかがえる。

さらに碑文には、「此城」は神亀元年(724)に按察使兼鎮守將軍大野東人が造営したことが記されているが、天平九年(737)に藤原麻呂らが大野東人と協議して、多賀柵と出羽柵とを結ぶ道を開いたことが正史にみられることなどからすると「此城」とは、多賀城を指しているのか、多賀柵を指しているのかはわからない。

「城」と「柵」の違いはあっても、どちらにも「多賀」の名称が冠せられており、大野東人が陸奥国に着任した頃には、すでに「多賀」の名称で呼ばれていたのではないだろうか。

「多賀」の名称については、定説をみるとできないが次のいくつかが語られている。

① 常陸国から陸奥国への移民説

常陸国高国造→多珂郡(好字の制度による)
→後に多賀郡と改まる。

② 多賀神社説

郷説・遠隔地から陸奥国への移住者が、近江国犬上郡の多賀神社を分霊して来たからと語られている。近隣には多賀城市市川、仙台市太白区富沢、名取郡皇檀原に多賀神社がある。(多賀城市市川の多賀神社には、志賀信濃守藤原廣喜書の棟札がみられる)

③ 古代中国の鏡の銘文による説

「四夷服多賀国家人民息(四夷を服し多く国家に賀ありて人民を息んず)」から多賀城の名称が名付けられた。

以上のいずれの説にも真実味は感じられるが、多賀城の生い立ちについてもう少し考察をしてみたい。

多賀城碑碑文の神亀元年(724)に「此城」が置かれたという記述は、この年に完成をしたと理解したい。すると、養老年間の早い時期から築城が始まっていた筈である。

特に瓦の生産には、その技術をもった朝鮮から渡来の瓦工人の人達がかかわっている。

「新羅人潤清等十人陸奥国配置。潤清等才長於造瓦 預陸奥修理府料瓦事 今長其道者相從伝習(三代実録・貞觀十二年十五日)」この条文は貞觀震災の復興についてであるが、渡来の瓦工人は相当早い時代からかかわっていたものと思われる。

多賀城の地は、朝廷の勢力と蝦夷の勢力が接近対峙している最前線であるから、この瓦の工人達は朝鮮語で「タガ・다가」と呼んでいたに違いない。「タガ」とは朝鮮語で(近づく・接近する)の意であり、多賀城はタガの地、タガの場所であったのである。その「タガ・다가」に漢字の好字「多賀」を当てて「多賀城」と名付けられたのではないだろうか。

ちなみに、「奈良」は朝鮮語で「ナラ・나라(國、国家)」。「伊勢」は「イーセ(二世、子孫)」であり、「山」は「サン(釜山・元山)」などである。

参考にした文献

- 日本語の起源 … 笹谷政子
- 歴史の宝庫—多賀城 … 平川南
- 読める年表 日本史 … 自由国民社
- 多賀城六百年史 … 宮城県教育會
- 多賀城町誌 … 多賀城町
- 利府町誌 … 利府町
- 続日本紀 … 講談社
- 多賀城と古代東北…宮城県多賀城跡調査研究所
いしづみ … 多賀城市史跡案内サークル

「多賀城」の由来は？

【多-4】 大橋 光雄（多賀城市）

古代においては、「城」も「柵」も「キ」の音(おん)で同義に用いられていた。「城」は築地や土壘を、「柵」は、材木列などのような閉じられた構築物をさす。そこで、「多賀城」の名は「多賀」がどこから来たか、が焦点となる。

まず、「多賀」の名が現れるのはいつかを簡単にみてみる。

737年(天平9年)陸奥国「多賀柵」(続日本紀)

752年(天平勝宝4年) 陸奥国「多賀郡」(続日本紀)

762年(天平宝字6年)“多賀城碑”建立。

*724年(神亀元年)「多賀城」設置。

780年(宝亀11年)「多賀城」文献初見(続日本紀)。

796年(延暦15年)多賀神社從五位下賜る(日本後記)。

などが挙げられる。

すなわち、724年(神亀元年)以前に「多賀」という名が何らかの形で存在していたことがわかる。“多賀城碑”にいきなり「多賀城」が登場するとは考えにくいのである。そこで、「多賀」に関連すると思われる「多賀神社」について考察してみる。

参考としたのは、927年(延長5年)成立の延喜式である。巻9、10はいわゆる神名帳と呼ばれる。ここに記載されているいわゆる式内社をみると、伊邪那岐大神を祭神とする「タガあるいはタカ」と名のつくのは全国で5社ばかりとみられ、そのうち3社は陸奥国にある。「タガあるいはタカ神社」でもっとも古いのは、古事記や日本書紀にも登場する滋賀県犬上郡に鎮座する現在の多賀大社とされる。しかしこの神社は神名帳には「多何神社2座」の記載で小社である。「多賀神社」に改称したのは927年(延長5年)のことと思われる。ちなみに、「多賀大社」への改称は1947年である。また陸奥国の名取郡「多加神社」は、景行天皇40年日本武尊東征の際に勧請したと伝えられる由緒ある神社であるが、もし国府の「多賀城」への移動と共に「多賀城」へ分詞ないしは勧請された、とすればその名も「多可神社」とするのではなかろうか。また行方郡での記載は「多珂神社」である。「多賀神社」と記載しているのは、遠江国

:あら玉郡「多賀神社(現社名は高根神社)」と、宮城郡の「多賀神社」である。ただ遠江国の「多賀神社(現社名は高根神社)」は巨石信仰の由来をもち保食命を奉る。旧塩釜街道の總社宮に続く道端に今もポツンと古色蒼然と鎮座する「多賀神社(雄略天皇5年(461年)建置ともいわれる)」は、延暦15年(796年)には從五位下を賜っている。

これらのことより、737年(天平9年)陸奥国「多賀柵」、“多賀城碑”における「多賀城」の名が登場するのは、宮城郡の「多賀」の命名に独自の理由があると考える。そのヒントは、「多賀神社」の拝殿の前に架けられている「箍(タガ)」にあるのではなかろうか?「箍」は、竹などを裂いて編んだ輪のことで、桶やたるなどの周りにはめ堅く締めるために使われる。「箍」の語源を調べると、「箍」がゆるむと胴体がバラバラに分解されてしまうことに喻え、感覚が鈍つたり規律が緩むことを言うのである。「多賀神社」の「箍」がいつ頃から架けられ信仰されたかの起源は定かでないが、蝦夷を抑えるべく北上する国家側の統率された力を緩むことなく維持する目的で、その本質が日本本土を創生した神である伊邪那岐大神を祭る神社として「箍神社」を建てたものではなかろうか。そしてこの「箍」が「多賀」に変わったのは、713年(和銅6年):諸国の郡・郷の名は好き字を着けしむ、の定めによると思われる。ちなみに「多賀」の「賀」は、たたえる、ことほぐ(言祝)などを意味する縁起の良い字である。現在も箍が何個か連なって供物として懸けられているがこれは古代の名残とみてよいのではなかろうか。なお、古代の「タカ」は神の座所としての「高」を意味していたとも言われるが、「高」が好字として「多賀」になったとすれば「多何神社」や「多加神社」なども神名帳に「多賀」と記載されると思うのである。神社命名の経緯は、それぞれの国や郡あるいはその地方の特異性により異なっていたのであろう。

いずれにしても、伊邪那岐大神を祭る神社としての「箍神社」が、「多賀神社」や「多賀柵」、「多賀城」という様に多賀の名が冠されていったものと考えるのである。

以上

講評



講評

選考委員代表

(みやぎ街道交流会会長)

白鳥 良一

今回のテーマは①「西」は何を意味しているのか？②「多賀城」の由来は？といった漠然としたものだったので、果たしてどれだけの応募がくるのか不安でしたが、結果的には13人の方から応募があり安心しました。漠然としたテーマだったことがかえって皆さん想像力をかきたてたのでしょうか。内容をみると、学問的な成果を取り込んだ研究論文的なもの、エッセイないし小説的なもの、それらの中間的なものに大別されますが、いずれも自由な発想で持論を展開しており、大変楽しく読ませていただきました。

入選作品の選考では、力作揃いでなかなか優劣をつけがたく、大変苦労しました。従って、入選作品とそれ以外の作品との差は紙一重といったところでした。

賞の選考にあたっては、審査員の得票と来場者の得票を合算して、大賞と優秀賞を決めましたが、大賞、優秀賞ともに奇しくも審査員の評価と来場者による評価が一致し、大賞の大畠さん、優秀賞の小林さんともに高得点でした。

入賞・入選作品に対する寸評は以下のとおりです。

大賞 大畠 直晴 氏 <テーマ①>

西は天皇のいる平城宮を指し、碑は天皇の権威を示すために建てられた。碑を建立したのは藤原朝穢ではなく淳仁天皇である、とするもの。研究論文的で説得力があり、説明もうまかったことが来場者からの高得点につながったのではないか。

優秀賞 小林 悅子 氏 <テーマ①>

西は靺鞨を含む大陸全体を指し、国際的視野から西からの脅威を 1250 年前の藤原朝穢が警告した碑としてとらえ、現代の竹島や尖閣諸島問題と関連づけて西との協調を訴えた。文章もうまくまとまっており、力強い発表が来場者の心をつかんだ

入選 氏家 範雄 氏 <テーマ①>

多賀城は陰陽五行説で五方の位置に割り当てられた「西」とされたので、多賀城を指しているとするもの。陰陽道は古代国家の基本理念で、宮都の造営設計などはすべて陰陽道(風水)に基づいていたことを思えば、多賀城や城外の方各地割りを風水といった観点から捉えることはきわめて斬新な視点。限られた時間では充分に説明しきれなかったきらいがある。

入 選 松浦 佳子 氏 <テーマ①>

西は西方十万億土にある淨土を意味し、都から多賀城にきていた人たちが望郷の思いで都の方角を望みさらにその西の極楽淨土に思いをはせていたのではないかとするもの。文章力があり、エッセイとしてはとてもすばらしい。

入 選 伊藤 均 氏 <テーマ②>

この地に常陸国多珂郡からの柵戸が移配されたことにより多珂郷ができ、多珂に好字の多賀があてられて多賀柵の名の起源となり、多賀柵の規模拡充により多賀城と呼ばれるようになったとするもの。研究論文的であるが、一般的に知られている説もある。

入 選 武田 俊一郎 氏 <テーマ②>

多賀はヘビやエビを意味する蛇蝦または虎を連想させる竹からきたもので、非道・極悪な蝦夷の別称として征討を正当化させるものとする。とてもユニークな発想であったが、発表での説得力が乏しかったように思えた。

特別賞 佐々木 稔 氏 <「西」について>

西は鞣鞆国を指すとし、アムールという西の国から来た主人公の望郷の思いを想像力豊な小説に仕立てた。極めて限られた字数の中でうまく纏め上げ私たちを楽しませてくれた。

今回は2つのテーマに絞りましたが、多賀城碑にはこのほかにも、里程、文字の書体・書風、文字の割付寸法、官位などまだまだ解明されていないなぞが沢山残されています。考古学の発掘調査だけでは解決できない問題もあります。

多賀城市史跡案内サークルでは、来年度以降もこの「多賀城碑のなぞを探る」の企画を続けるとのことです。かつて全国から多賀城碑を訪ねて多くの文人墨客が押し寄せたように、碑が再び脚光を浴びるよう盛り上げていければと思っておりますので、多くのみなさんにこのイベントを周知していただき、来年はよりたくさんの応募作品が集まりますよう念願しております。

(なお、今回の入選作品は1/15、4/15、7/15、10/15 に発行される機関誌「いしぶみ」に掲載の予定とのことです。)

4. 記念講演会

[演題]

『多賀城跡－近年の新たな成果－』



〈講師〉

宮城県多賀城跡調査研究所所長
佐藤 則之 氏



講師プロフィール

1953年（昭和28年）生まれ
栃木県氏家町（現さくら市）出身
東北大学文学部で考古学を専攻
1979年4月（昭和54年）から多賀城跡調査研究所勤務（5年間）
宮城県教育庁文化財保護課勤務
2010年（平成22年）東北歴史博物館研究部長
2011年4月から現職

多賀城跡－近年の新たな成果－

宮城県多賀城跡調査研究所 佐藤 則之

1はじめに

『特別史跡多賀城跡』は、昭和35年から来継続的に発掘調査が行われており、昭和44年からは多賀城跡調査研究所が調査・研究を行ってきた。この間、漆紙文書の発見など数多くの貴重な発見があり、政庁の変遷の解明など重要な成果を挙げてきた。こういった成果はそのつど公開されてきたが、その集大成として東北歴史博物館で特別展「多賀城・大宰府と古代の都」が開催され、「多賀城跡－発掘のあゆみ2010－」が刊行された。ここでは、最近10年間くらいの多賀城跡の新たな成果について、政庁、外郭南辺、外郭東辺の順に紹介する。

2政庁跡

2004年から2012年まで断続的に調査が行われ、2010年に『政庁跡 補遺編』が刊行された。調査の結果、以下のような新たな発見や過去の知見の修正が行われた。

- ・第Ⅰ期の掘立式の正殿は、梁行が従来2間と推定されていたが調査の結果3間であることが確定した。また、礎石式の正殿は火災に遭っていることが判明した。
- ・第Ⅱ期の礎石式の脇殿と楼が第Ⅲ・Ⅳ期と同位置で新たに発見された。したがって、脇殿は第Ⅰ期から、後殿と楼は第Ⅱ期から同位置で第Ⅳ期まで存続したことが明らかとなった。また、政庁北辺築地の中央部には北殿が存在したことが明らかになった。
- ・出土した国産の陶器（緑釉陶器、灰釉陶器、山茶碗系陶器、瓷器系陶器）や貿易陶磁器（青磁、白磁、青白磁、緑釉・褐釉陶器）などの再検討から、政庁は少なくとも11世紀中頃までは機能していたと推定された。

これらのことから、正殿や脇殿、南門は第Ⅰ期から第Ⅳ期まで同位置に存在しており、政庁の構成は一貫して変わっておらず、政庁の性格や役割も変化していないことが明らかになった。

第Ⅱ期には建物などが礎石式になり、楼や後殿、翼廊、北殿、石敷広場などが付加されて豪壮な、様々な機能を果たしうる整備された政庁となった。したがって、第Ⅱ期は非常に大きな画期であることが判明した。一方、第Ⅲ期と第Ⅳ期は皆麻呂の乱による火災と貞觀地震からの復旧であり、新規の建物は建築されず、第Ⅲ期には装飾性が高かった第Ⅱ期の翼廊や北殿は復旧されなかったことから、実質本意の復旧・復興がコンセプトであったと思われる。

3外郭南辺

外郭南辺では、第72・73次調査（2000、2001年、第Ⅱ期南門の東西両側の築地塀の調査）と第74次調査（2002年、SB2776建物跡の発見）が行われた。

築地塀の調査

従来、第Ⅰ期は本体は不明であるが掘立式の寄柱の時期であり第Ⅱ期は築地本体+

礎石式の寄柱であるとみていたが、東西両側とも皆麻呂の乱による火災以前には築地本体+掘立式の寄柱の1時期しか確認できなかった（部分的な改修の痕跡はあった）。この場合、確認された築地塀が第Ⅰ期のものとすると、大規模な改修の時期である第Ⅱ期の改修の痕跡が残っていないことやそれにもかかわらず屋根に瓦が葺かれたことになり不自然であり、第Ⅱ期のものとすると第Ⅰ期の本体や基礎地業まで削平して新たに築地塀を造営したことになりやはり不自然な状況であった。

SB2776 の調査

政庁南門間道路のほぼ中央で、掘立式の門を発見した。政庁南門の南 190m にあり、従来の外郭南門の北 120m にある。この門は掘立式であることから第Ⅰ期と考えられたが、従来の外郭南門との関係は不明であった。

一方、SB2776 の東側では、2006 年の第 79 次調査で第Ⅱ期の城前地区的官衙以前の積土遺構が検出され、それ以前の第 38・41 次調査の SX1261 筏地業や SX1339 積土遺構とこれらがほぼ直線上に並ぶことから、門の東側には何らかの区画施設が存在したことが推定された。また、門の西側でも 2008 年の第 81 次調査で筏地業とその上に盛土された SX2959 基礎地業が発見され、門の西側にも区画施設が存在したことが明らかとなった。

この結果、外郭南辺は、第Ⅰ期には SB2776 外郭南門と筏地業などの基礎地業上の区画施設であり、第Ⅱ期以降は 120m ほど南側に移動した SB201 外郭南門と SF202 築地塀であると推定されるようになった。このように考えた場合、築地塀の調査で生じた不自然な状況は解消される。

なお、SF202 築地塀構築時に田屋場横穴墓群を壊しており、築地の基礎地業の下層から横穴墓に供えられた須恵器の平瓶が発見され、同時に発見された土師器の年代と考えあわせて 7 世紀後葉から 8 世紀前葉頃と考えられてきた。しかし、須恵器の年代を再検討したところ 750 年を遡らない可能性が高いと考えられ、SF202 の構築年代も同様に 750 年を遡らないこととなり、上記の結論を裏付けている。

4 外郭東辺

2009 年の第 82 次調査で掘立式の第Ⅰ期外郭東門を発見した。第Ⅱ期には北へ 166m ほど移動して、礎石式の門に建て替えたことになる。移動の理由は不明だが、門の移動はそれに取り付く城内・城外の道路の移動を伴っており、非常に大きな変革であったと思われる。なお、東門は第Ⅲ期には内側に入り込んだ場所に移動している。移動の理由はやはり不明である。

また、第Ⅱ期の櫓も発見された。従来、櫓は第Ⅲ期以降に付設されたと考えられてきたが、第Ⅱ期には存在していることが明らかとなり、多賀城より古い郡山官衙遺跡第Ⅱ期官衙の外郭線にも櫓が付設されていることから、多賀城の第Ⅰ期にも櫓が存在した可能性が高いと考えられる。

5まとめ—藤原朝獣と多賀城碑—

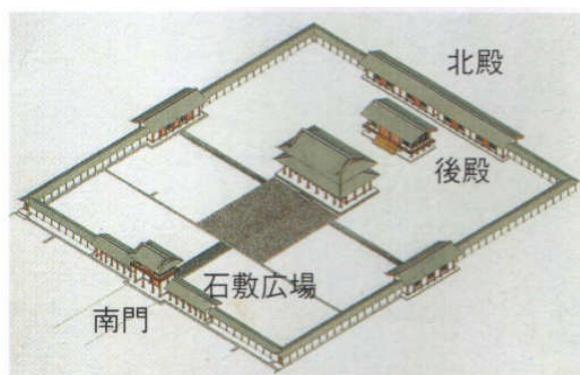
以上のように、政庁では新たな建物が加わり、外郭線では南辺が南へ移動したことや東門が北へ移動したこと、築地塀が瓦葺きになったこと、主要な建物が礎石式にな

ったことなど大きな変革が第Ⅱ期にあったことが明らかとなり、第Ⅰ期よりははるかに豪壮な施設となった。したがって、第Ⅱ期は多賀城にとって最も大きな画期であり、そのコンセプトは対蝦夷政策実行のための律令政府の実力（本気度）をアピールすることであったと思われる。実際に藤原朝鶴を陸奥出羽按擦使兼鎮守將軍に任命して多くの政策が実行された。朝鶴は時の権力者藤原仲麻呂の四男であり、東海東山節度使（東山節度使は文献では確認できない）でもあった。東北地方のみならず東日本全体の実効支配権を与えた自分の息子を多賀城に派遣したことになり、仲麻呂がいかに東北経営を重要視していたかがわかる。

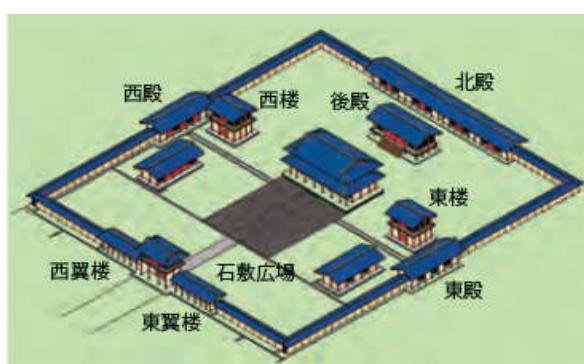
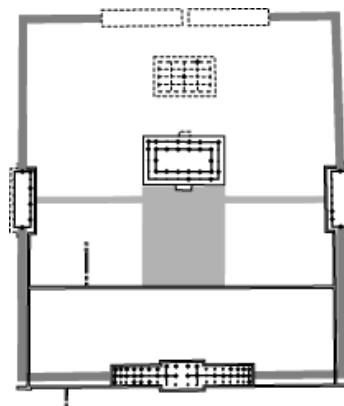
朝鶴は多賀城の修造だけではなく、秋田城の改修、雄勝城・桃生城の造営など多くの事業を遂行した。多賀城碑は多賀城修造の記念碑といわれているが、朝鶴が自分を顕彰するために造立した碑でもあったと考えられる。

6 おわりに

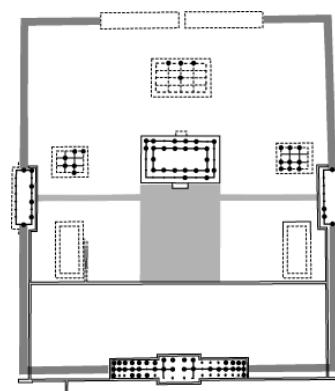
多賀城跡は古くから歴史的に重要な遺跡として有名であり、地域の方々をはじめとする多くの人々のご努力とご協力によって保護・保存されてきました。また、多くの研究者によって多賀城の歴史的位置づけが明らかにされてきました。このような歴史的に重要な多賀城の解明を進めていくのは現代に生きる我々の使命であり、同時に後世に伝えていくのも重要な使命であると思います。そのためには多くの方々のより多くのご理解とご協力が必要であり、今後ともご支援をよろしくお願ひいたします。

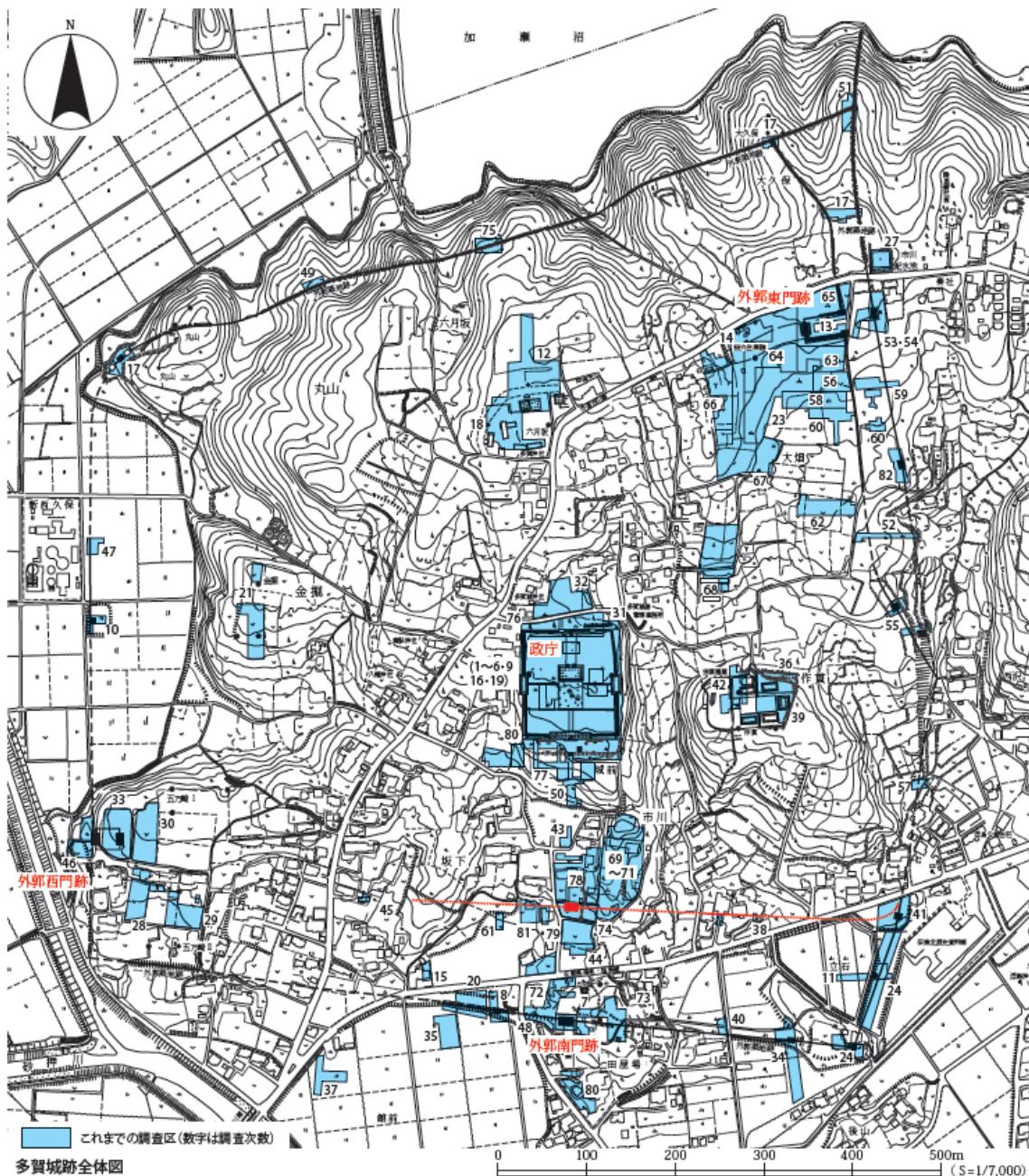


従来の第Ⅱ期政庁

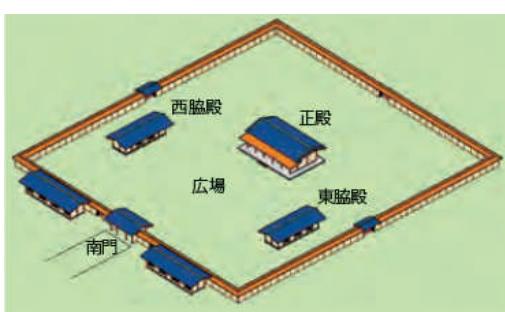


再調査後の第Ⅱ期政庁





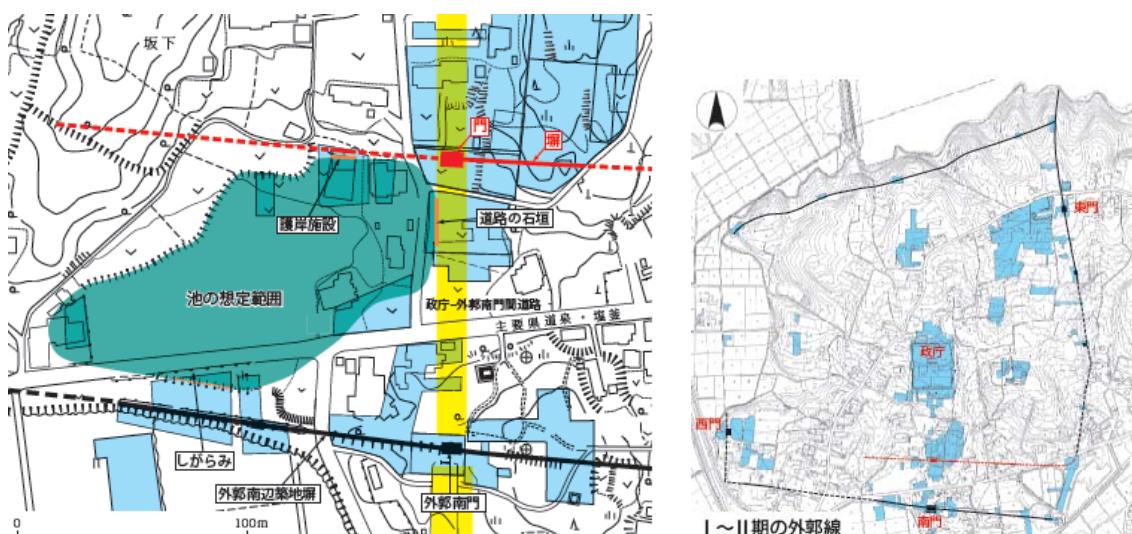
多賀城跡調査位置図



第Ⅰ期政庁



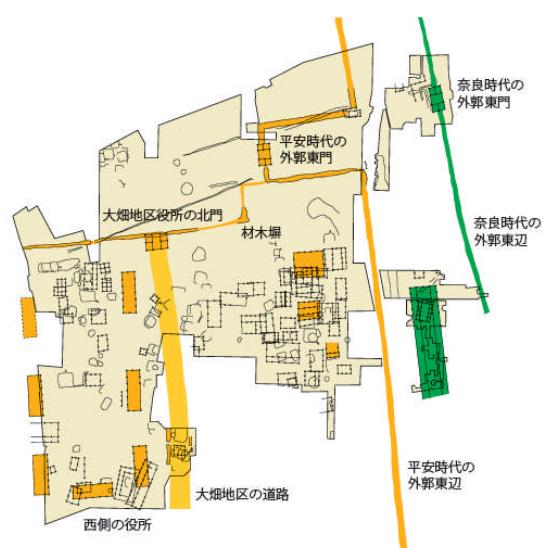
第Ⅲ期政庁



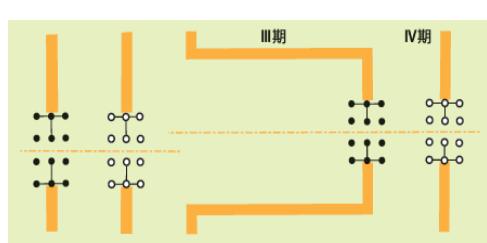
第Ⅰ期の南門と第Ⅱ期の南門



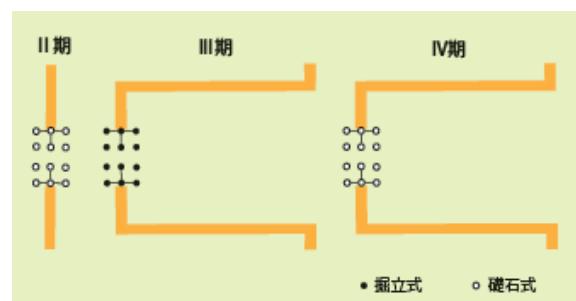
第Ⅰ期の東門



第II・III・IV期の東門



西門模式図



東門模式図

5. 探訪ウォーク



Aコース：古代多賀城跡の史跡を巡る（全約5km）

JR 東北本線[国府多賀城駅]出発～漏刻モニュメント～（南北大路跡）～外郭南門跡～多賀城碑～政庁跡～外郭東門跡～陸奥総社宮～館前遺跡～JR 国府多賀城駅着

【案内者】 多賀城市史跡案内サークル：大橋光雄・後藤俊彦・宮城武雄・佐藤利昭

Bコース：歌枕の地(奥の細道)を訪れる（全約7km）

JR 仙石線[多賀城駅]出発～末の松山～沖の井（沖の石）～野田の玉川・思惑の橋～（多賀城廃寺）～多賀城碑～芭蕉翁礼賛の碑～浮島～JR 国府多賀城駅着

【案内者】 多賀城市史跡案内サークル：小澤操・熊谷恵一・伊藤均

Cコース：多賀城跡近傍の神社を巡る（全約7km）

JR 東北本線[陸前山王駅]出発～山王遺跡（国司館跡）～日吉神社～南宮神社～貴船神社～多賀城神社～多賀神社～陸奥総社宮～荒はばき神社～浮島神社～JR 国府多賀城駅着

【案内者】 多賀城市史跡案内サークル：松川和夫・小林悦子

写真：政庁南門跡付近から政庁跡を望む

Aコース：古代多賀城跡の史跡を巡る

■ 日 時：平成24年12月2日[日] 9:30集合

■ 集合場所：JR東北本線[国府多賀城駅]

■ コース概要：

JR東北本線[国府多賀城駅]集合・出発～漏刻モニュメント～(南北大路跡)～外郭南門跡～多賀城碑～政庁跡～外郭東門跡～陸奥総社宮～館前遺跡～JR国府多賀城駅着（全約5km）

○ 参加人数：14名

○ 案内：「多賀城市史跡案内サークル」メンバー（大橋光雄・後藤俊彦・宮地武雄・斎藤利昭）

■ 参加レポート

晴れて気持ちのよい天候のもと(ただし少し寒いけど)、探訪ウォークが行われました。

●JR国府多賀城駅から政庁跡周辺をじっくり巡る、一番短い約5kmのコースです。すたすた歩けば1時間半位ですが、そこを4時間(昼食時間除き)くらいかけてじっくり巡りました。

●多賀城市史跡案内サークルのガイドは、熱がこもり、多賀城碑前では、時間が経つのも忘れるほど

●知的好奇心旺盛な参加者からも、さまざまな質問が飛び出し、楽しいやり取りとなりました。

●陸奥総社宮での参拝は、100社分(?)の御利益に預かろうと皆さん熱心に参拝されていました。

神殿横の樹齢600年以上の老杉と寄り添う220年以上の白木蓮は仲の良い夫婦にみたてられ、神樹となっています。

毎日新聞社の取材や参加者同士でも和気あいあいと語らいながらの、街道ウォーク、大変興味の尽きない、すばらしい探訪会でした。来年は気候の良い時期での開催を期待する声が、皆さんからあがっていました。

Aコース写真集



出発前でコース紹介



漏刻(水時計)モニュメント



南北大路跡



多賀城碑と芭蕉翁礼賛碑



政庁に続く階段



政庁跡説明板前



政庁南門礎石



後村上天皇御座之碑前



外郭東門跡付近



陸奥総社宮



陸奥総社宮脇の老杉
(樹齢600年以上)



館前遺跡

Bコース：歌枕の地(奥の細道)を訪ねる

■日 時：平成24年12月2日[日] 9時30分集合～14時解散

■集合場所：JR仙石線[多賀城駅]

■コース概要：

JR仙石線[多賀城駅]集合・出発～末の松山～沖の井(沖の石)～野田の玉川・思惑の橋～(多賀城廃寺)～多賀城碑～芭蕉翁礼賛の碑～浮島～JR国府多賀城駅着(全約7km)

○参加人数：17名

○案 内：「多賀城市史跡案内サークル」(小澤操・熊谷恵一・伊藤均)

■参加レポート

多賀城跡周辺には歌枕の地がたくさんあり、西行や芭蕉の気分で訪ねる探訪ウォークです。

- 末の松山は、岩手県二戸市の浪打峠との説もありますが、古今集の「君をおきてあだし心を我がもたば末の松山波も越えなむ」とはこの多賀城に違いありません。浪打峠は山の中になりますから！
- 沖の井(沖の石)は、今は住宅地の中にありますが、いにしえの頃は海岸の磯を思わせる景観でした。
- 野田の玉川も岩手県三陸の玉川村やいわき市小名浜など諸説ありますが、この玉川説が一般的です。平成4年に「水・緑景観モデル事業」として整備し、平成7年に手づくり故郷賞を受賞しています。
- 今回テーマから外れますが、途中に多賀城廃寺に寄りましたが、再度ゆっくり訪ねたいところです。
- 多賀城碑は、建立から1200年を経て、今我々に何かを語りかけるようにドッシリと建っていました。

歌枕の壺の碑云々は別として、東北には大切な歴史遺産であることに違いありません。

大変に寒い日で、風がないことが幸いでした。

どのコースも大変興味をそそられる内容で、今度は別のコースを訪ねたいとの要望がありました。

Bコース写真集



出発前あいさつ



末の松山



沖の井の前



沖の井



八幡2丁目の地蔵尊



野田の玉川



思惑の橋



思惑の橋からの野田の玉川



多賀城廃寺



多賀城碑



浮島神社



国府多賀城駅でお疲れ様！

Cコース：古代多賀城跡の史跡を巡る

■ 日 時：平成24年12月2日[日] 9時30分集合～14時解散

■ 集合場所：JR東北本線[陸前山王駅]

■ コース概要：

JR東北本線[陸前山王駅]集合・出発～山王遺跡(国司館跡)～日吉神社～南宮神社～貴船神社～多賀城神社～陸奥総社宮～荒はばき神社～浮島神社～JR国府多賀城駅着（全約7km）

○ 参加人数：12名

○ 案 内：「多賀城市史跡案内サークル」（松川和夫・小林悦子）

■ 参加レポート

寒気がことのほか厳しい冬晴れの中、探訪ウォークが行われました。

●JR陸前山王駅から多賀城近傍の神社を巡る、約7kmの長いコースでした。途中市川地区集会所で昼食と暖をとった以外は、案内人の方の説明を聞きながらじっくりと多賀城近傍をめぐり歩きました。

●陸前山王駅前すぐに10世紀前半の国守館跡と考えられている山王遺跡があり、由緒ある歴史のまちだということをまず学びました。

●歴史あるまちだけあって、神社についてもそれぞれ大変由緒あるものばかりでした。陸奥国府時代に国司や民が崇敬していた「多賀神社」、美濃国不波郡に鎮座する南宮神社の分霊を奉祀した「南宮神社」、滋賀県大津市坂本に由来する「日吉神社」など…

かなり寒い日でしたが、参加者の皆さん大変お元気で和気あいあいと語らいながら、多賀城の神社をめぐりました。歴史に詳しい方も多く、案内役の方も教えてもらったりなど、皆さん大変有意義な探訪ウォークになったものと思います。

Cコース写真集



陸前山王駅で多賀城の紹介



山王遺跡の紹介



日吉神社



田んぼの中にある南宮神社



至る所に発掘調査現場が



貴船神社



貴船神社の樹齢450年の檜



多賀城神社



素朴な外観の多賀神社



100社以上が合祀される陸奥総社



荒はばき神社
今も参詣が絶えず、多数の靴、鍔の供え物が



浮島神社

6. 新聞報章

平成24年12月2日(朝) 河北新報

歴史の謎解き市民挑む

76年12月1日建
立から250年が経つ
た国重文化財の多賀城
碑が伝えるメッセージを
読み解く発表会「多賀城
碑のなぞを探る!」が1
日、多賀城市の東北歴史
博物館であつた。碑の歴
史的背景や存在意義に理
解を深めてもらおうとい
多賀城市中藤案内サーク
ルとみやぎ街道交流会
（仙台市）が主催、歴史
零学家ら約80人が来場し
て、西が意味する「多賀城の由来
た。碑には「西の文字が
刻まれ、多賀城から平城
京などへの距離や、多賀
城の創建（724年）と
改修（762年）が書か
れている。なぜ
れたのか、なぜ
ていない点を考
え、「西が意味する
多賀城の由来
た人々が差異
について、「陰
で多賀城に割り
た元素二「大寺

多賀城で発表会と刻まれた。明治されどのうちの二つは、店舗にさしの意味で、五行説でられ指し、

日中關係の大たを譲るかどうか、1250年以前の経告などと並列的な言葉が披露された。大賞には西に記したように、あたはる天皇の権力を證示したという壇蓋市の大垣直昌さん(67)が選ばれた。

2日は国特別史跡の多賀城跡や市内の歴史的建造物を訪れる。史跡案内や、クルの大山真由美会長は「来年も開催し、松尾芭翁ら訪れた碑を多くの人に知ってもらいたら」と話した。

7. アンケート結果



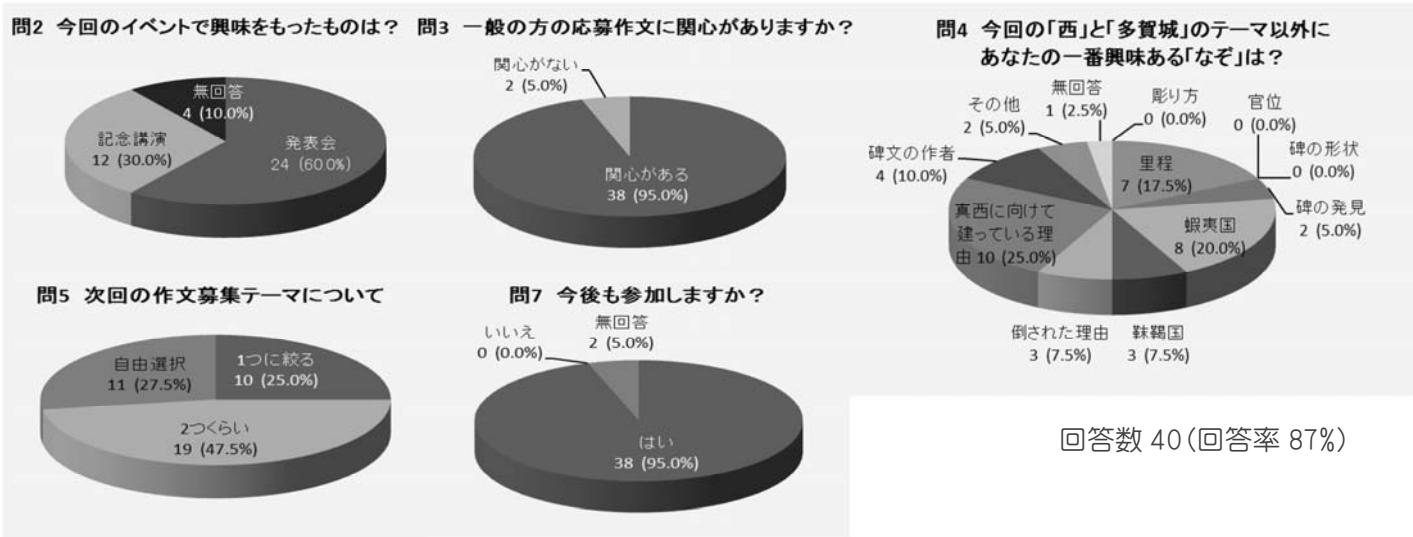
写真：多賀神社と奉納された縄（タガ）

参加者アンケート集計結果

◎第1部(発表会・記念講演)

アンケート集計の結果はつぎのとおりです。

- 参加者の 60%が発表会に興味を持ち(問2)、95%が応募作文に関心がある(問3)。
- 今回のテーマ以外に一番興味のあるものは、「西に向けて建っている理由」25%、「蝦夷国」20%、「里程」18%、「碑文の作者」10%で、以下「靺鞨国」、「倒された理由」、「碑の発見」の順である(問4)。
- 次回のテーマ数として、今回と同じく「2つくらい」が 48%となっている(問5)。
- 95%が今後も参加するとしている(問7)。



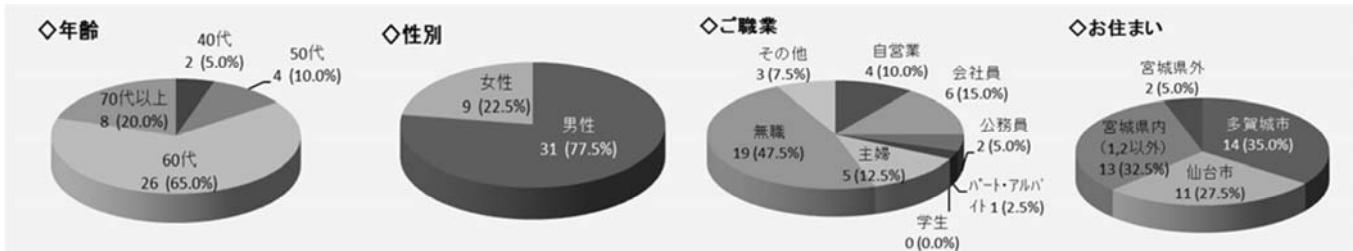
自由記述での感想は次のとおりです。

- 今後とも盛り上がるとよろしいですね。/とても楽しかった。皆さん、すばらしいですね。
- この度の企画は多賀城建碑1250年目ということに思いを巡らせてとても良い企画と思いました。これからも続けて欲しい企画です。/発表出来る機会があることはとても良いことだと考えます。
- 学術的なレベルの高さに敬意を表します。

また、貴重な意見も頂きました。今後の企画運営にあたり、検討していく必要があると考えています。

- 次回作文テーマであるが、テーマを決めたものと、自由に書くものとがあると、広がりが出て発表も面白いように思う。今回もそれぞれの意見があって興味深かったが、専門的な文言で、作文と話だけでは意味がとれず難しいものもあった。
- 今回の企画は、大変興味深く参加させていただきました。参加者に高齢者が多かったのは仕方ないかも知れませんが、小中学生や家族、親子参加に輪を広める工夫をされるとさらに盛り上がるかも知れません。この会場に小学生や親子連れが参加すると盛り上がりますね。/若い方が沢山参加するようなアプローチをもつとした方が良いかと思う。/より多くの市民に、わかりやすく、楽しく伝える事業の展開に期待します。/前もって、各方面に宣伝して欲しいです。

参考：回答者の属性



◎第3部(探訪ウォーク)

アンケート集計の結果はつぎのとおりです。

- 参加者の 96%が大変良かった・良かったと答えている(問2)。

- 各コースの印象に残った場所としては、

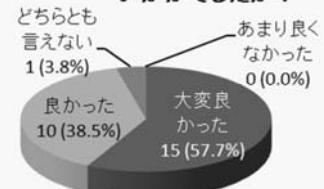
【A コース】多賀城碑 56%と多く、他に漏刻モニュメント・南北大路跡・

外郭南門跡・陸奥総社宮が挙げられている(問 3-A)。

【B コース】多賀城碑 35%と多く、末の松山と野田の玉川(思惑の橋)
が 20%、他に沖の井・浮島が挙げられている(問 3-B)。

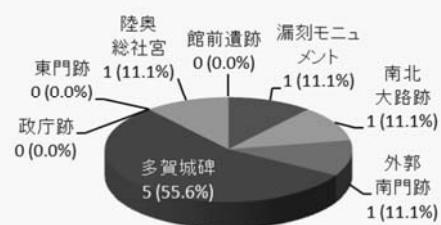
【C コース】荒はばき神社が 25%と多く、多賀神社と南宮神社が 17%、他に山王遺跡・日吉神社・
陸奥総社宮・浮島神社が挙げられている(問 3-C)。

問2 参加したコースの内容は
いかがでしたか?

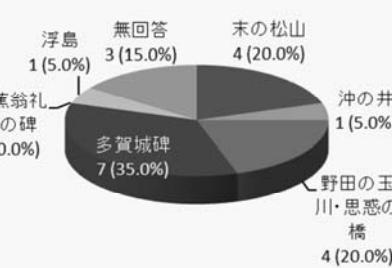


回答数 26(回答率 96%)

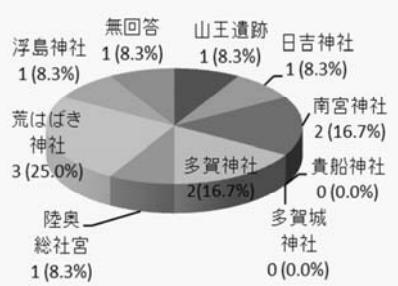
問3-A 印象に残った場所はどこでした
か? 【Aコース】(複数回答)



問3-B 印象に残った場所はどこでした
か? 【Bコース】(複数回答)



問3-C 印象に残った場所はどこでした
か? 【Cコース】(複数回答)



自由記述は次のとおりで、大勢は良好な感想・意見ですが、今後の参考となる意見にも配慮してまいりたい
と思います。

問 2(参加したコースの内容)の自由記述

【A コース】 大変良かった／平泉を思い出しダブった／詳しく説明してもらった／とても寒かった。

【B コース】 各々の位置関係がわかった／もう一度ゆっくり歩きます／暖かい時期に／
楽しいウォーキングでした／地元のことが分かりよかったです。

【C コース】 地元ならではの説明が良い／もう少し専門的に正確に。

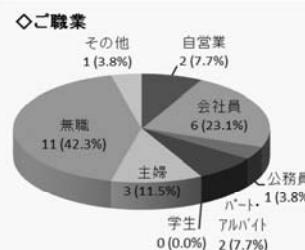
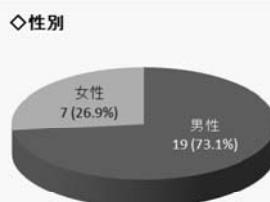
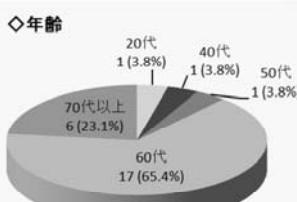
問 6(参加した感想や今後訪ねてみたい多賀城の場所)の自由記述

【A コース】 サークルの方々の丁寧な解説に感動した、BCコースも歩きたい／BCコースも歩きたい
／お寺関係／今後の活動に役立てたい 廃寺を訪ねたい。

【B コース】 案内板を全文読上げてよかったです／時間の配分をきちんと、説明もはつきりと。

【C コース】 適当な行程と時間であった。

参考：回答者の属性



[参 考]

- ✧ 主催・共催団体の紹介
- ✧ 多賀城市史跡案内サークル
20 年のあゆみ

主催・共催団体の紹介

多賀城市史跡案内サークル

古代の多賀城を中心とした歴史の学習、史跡案内を通じて、会員相互の親睦及び史跡訪問者との交流を図り、広く地域社会に寄与することを目的として、史跡案内や歴史教育への協力、月例勉強会の実施及び機関紙「いしぶみ」の作成・配布並び史跡周辺の清掃などの活動を行っています。

- 代表者 会長 大山 真由美 ➤設立 平成5年4月17日
➤連絡先 ☎985-0863 多賀城市東田中2-40-31-204
TEL 022-362-7142 FAX 022-362-7142
E-mail : lf204sm@alpha.ocn.ne.jp

みやぎ街道交流会

自然、歴史、文化、風土などの地域資源等の保存、持続可能な活用を通じた地域づくりに取り組む各種団体や人々の交流連携の場（プラットホーム）を目的として、県内及び東北各地の街道関連団体との交流・連携の実践や支援、地域資源の保存・継承のための探訪会や研修会・交流会を開催などの活動を行っています。

- 代表者 会長 白鳥 良一 ➤設立 平成19年5月3日
➤連絡先 ☎980-0014 仙台市青葉区本町1丁目13-32 オーロラビル 2F
TEL 022-722-3380 FAX 022-722-3381
E-mail : miyagi-kaidou@auone.jp
➤その他 URL <http://www.tohoku-kaido.com/miyagi>

おくの細道松島海道

仙台領、並びに特別名勝松島の歴史的文化遺産を学び、未来に伝えることを目的とした郷土史ボランティアの会です。郷土の歴史的文化遺産の保護や再建に賛同し、ボランティア・ガイドとしての協力、さらには『奥の細道』のミニ体験として「芭蕉の道をたどり、往時をしのぶ集い」を毎年、継続主催しています。又、毎月一回、定例の勉強会を行っています。

- 代表者 代表 京野 英一 ➤設立 平成12年7月23日
➤連絡先 ☎981-0215 松島町高城字反町一5-11（赤間正彦宅）
TEL 022-354-3146
E-mail : basho@malkyo.com

特定非営利活動法人 NPO しほがま

塩竈の海、みなとに関する歴史、文化の普及、広報を図り、郷土への愛着心やまちづくりへの活力を醸成するとともに、塩竈の魅力、個性の情報発信に寄与することを目的として、各種資料の収集、調査、展示、学習活動及び歴史的建造物の調査研究・復元・活用などとともに、歴史観光ボランティアガイドの育成・活動支援、港及び港の産業活動の普及・広報などの活動を行っています。

- 代表者 理事長 菅原 周二 ➤設立 平成15年12月5日
➤連絡先 ☎985-0016 塩竈市港町1-4-1
TEL 080-1833-3710
E-mail : minato-s@castle.ocn.ne.jp
➤その他 URL <http://blog.canpan.info/minatoshiogama>

多賀城市史跡案内サークルのあゆみ

平成3年3月から始まった多賀城市教育委員会主催の「史跡案内ボランティア養成講座」、そして、平成4年の同講座、同年9月の講座を連続して3回受講した人たちに「史跡案内ボランティアサークル」結成の機運が高まった。

平成5年2月17日、サークル結成のため浅野義彦、新妻信二郎、本田忠雄、木幡 茂、加藤誠吉、大山真由美の各6人による世話人会が発足。

同年4月17日、多賀城市文化センターで「多賀城市史跡案内サークル」の発足式が行われた。この発足式には、養成講座・全3コース・修了者全員に声掛けし賛同を得た29人の中、この日に出席した16人全員からサークル結成の承認を得て「多賀城市史跡案内サークル」は活動のスタートを切った。現在の会員は18名です。

■これまでの主な事業等

- 平成 5年 4月 サークル発足式・会の規約制定
- 5月 「多賀城跡あやめまつり」に初参加
- 12月 仙台育英学園2年生(486人)を初案内
- 6年 10月 多賀城大茶会・壺碑全国俳句大会に初参加
- 7年 3月 サークル移動研修「古碑めぐりの旅」
- 10月 東北放送テレビ番組スタッフを案内
- 8年 6月 NHK/B S放送番組スタッフを案内
天童市「奥の細道」研究会を案内
- 10月 全国観光ボランティア・横浜大会参加
- 9年 6月 救急蘇生法講習受講(会場:多賀城消防署)
仙台育英学園秀光中学校(現・秀光中等教育学校)1年生の案内
- 10年 4月 陸上自衛隊多賀城駐屯地第1教育隊の新入隊員の案内始まる。(~21年)
- 7月 J R東日本「駅長と歩く小さな旅」の案内始まる。
- 11年 7月 東京芝学園考古学会を案内
松島善意通訳の会との交流会
- 8月 明治大学歴史研究部を案内
- 12年 4月 北海道青苗中学校修学旅行の案内
- 13年 6月 「多賀城跡あやめまつり」を前に史跡の清掃始まる。
7月 機関紙「いしぶみ」創刊(現在:42号発行)
- 11月 弘前・花巻とのボランティアガイド合同研修会
- 14年 3月 史跡案内シーズンを前に政庁跡・北側築地周辺清掃
- 15年 3月 多賀城市教育委員会から教育功績者として表彰される。
8月 城南小学校5年生対象の史跡探検クラブ団員募集、5名参加(~10月)

平成 15 年 9 月	10 周年記念事業「私のエミシ考」論文募集
9 月	ジャスコ多賀城「黄色いレシートキャンペーン」団体登録開始
平成 16 年 2 月	財団法人宮城県文化財保護協会から表彰される。
3 月	10 周年記念事業「エミシを考えるシンポジウム」&論文授賞式
4 月	サークル移動研修「飛鳥・万葉の旅」
9 月	史跡案内ガイドマニュアル完成
11 月	多賀城市市制功労団体として表彰
17 年 11 月	移動研修「常陸国府を訪ねて」(講師: 石岡市教育委員会 田崎氏)
11 月	太宰府市との友好都市調印式出席
18 年 4 月	山形天童市友好都市締結式出席
7 月	移動研修「涌谷町の史跡」
12 月	講演会「武将歌人 伊達政宗」(講師: 伊達宗弘氏) 50 名参加
19 年 6 月	社団法人日本善行会の平成 19 年度秋善行賞を受賞
8 月	移動研修会「登米町の歴史探訪」(講師: 伊達宗弘氏)
9 月	高崎中学校 1 学年生の総合学習 協力
9 月	企画事業「工藤先生と歩く平泉への道」バス旅行開催 44 名参加
20 年 2 月	平成 20 年度歴史・観光講座検討委員会参加
4 月	東北歴史博物館特別展「エジソン展」ボランティア協力
5 月	移動研修「阿津賀志山&靈山」 11 月「三十三間堂遺跡」
6 月	多賀城市市民活動サポートセンター事務用ブース入居 (~23 年)
7 月	宮城いきいき学園ガイド協力開始
11 月	とうほく街道会議「第 4 回交流会 仙台・宮城大会」協力
21 年 10 月	移動研修「伊治城～覚べつ城」
10 月	宮城県より平成 21 年教育功績者(芸術文化)として団体表彰
22 年 5 月	奈良遷都 1300 年祭交流参加&研修旅行
6 月	東北歴史博物館特別展「しごと道具いまむかし」解説ボランティア協力
9 月	多賀城小学校「多賀城の歴史を学ぼう」校外学習への協力
9 月	多賀城市埋蔵文化財調査センター特別展「発掘された日本列島 2010」解説ボランティア協力
11 月	多賀城市観光ボランティア・埋文ボランティアとの合同研修会&懇親会
23 年 4 月	東北歴史博物館友の会に団体加入
10 月	みやぎ街道交流会「震災復興支援フォーラム『奥塩地名集』講演会&観月舟」協力
10 月	移動研修「秋田城&払田柵」(講師: 井上うたみどり氏 大野氏)
24 年 8 月	20 周年記念「多賀城碑のなぞを探る！」作文募集 (~10/20 締切)

※多賀城市教育委員会・東北歴史博物館・市内小学校などからの依頼により史跡ガイドを通年行っております。また、毎月第 2 土曜日には自主的なテーマを決めて勉強会を開催しています。



多賀城市史跡案内サークル(20周年記念)・みやぎ街道交流会協同
史跡のまち再生事業「多賀城碑のなぞを探る!」報告書

平成25年1月発行

発行 多賀城市史跡案内サークル
みやぎ街道交流会

写真：政庁南門付近から南北大路・古代都市を望む